

ふるさと

海東

第二十五輯



潮来市郷土史研究会

那珂湊の首塚（市指定文化財）



首塚（忠勇戦死之墓）

那珂湊市指定史跡

昭和四十六年十二月二十日指定 那珂湊市鶴代二三四一一

元治元年（一八六四）、尊王讓夷派（天狗党）と佐幕派（諸生党）との戦鬪は茨城県下に広がり、尊王讓夷派は最後の拠点として水戸藩随一の商業都市那珂湊に結集した。

海と陸との両方から包囲された尊王讓夷派は必死の抵抗をし、那珂湊での戦鬪は熾烈を極め、七十数日に及び長期戦になった。特に十月十日の戦鬪は激烈なものとなり、市内の至る所に飛び火して繰り広げられ、特に部田野原での戦鬪はすさまじく、尊王讓夷派は甚大な損害を被った。十月二十三日には尊王讓夷派（天狗党）の多くは投降しましたが、残りは包囲を破って京都を目指し、福井県敦賀の松原まで逃げ延びたが、悲惨な最期を遂げている。

この十月十日の熾烈な部田野原の戦鬪での戦死者の首級を手厚く葬ったのが首塚で、慶応二年（一八六八）十三奉行の人々がこの地に供養のために建てた石碑が忠勇戦死之墓である。

潮来市郷土史研究会

平成20年度
会 員 視 察 研 修 記 念



平成20年12月5日

特別名勝 六儀園 江戸の名園和歌の歌

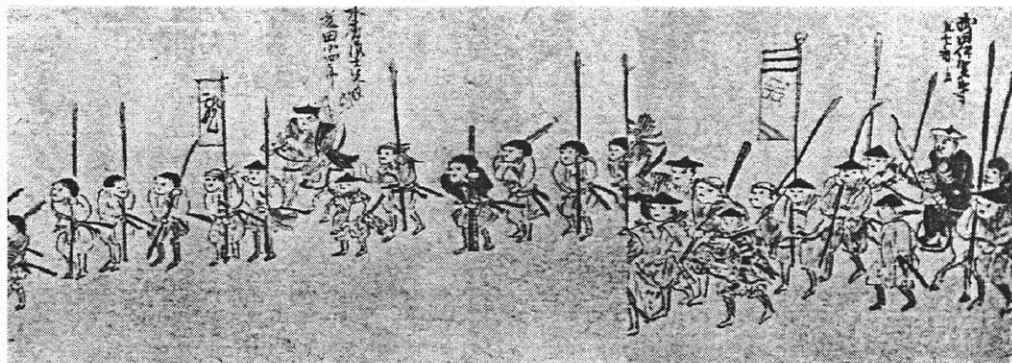
東京都 文京区本駒込6-16-3

目次

平成二十年度 天狗党史跡めぐり	1
正式隊耨碌翁徘徊記	9
天狗党西上勢	19
庚申山登頂	29
二十三夜尊堂	32
江戸後期水郷潮来地方における結婚の一考察	35
潮来と潮来ぶしの広がり	48
続 潮来紀行文(Ⅱ)	52
新しい発見を求めて	57
船頭小唄	63
私の潮来史	70
編集後記	

平成20年度 天狗党史跡めぐり

平成21年1月24日（土）

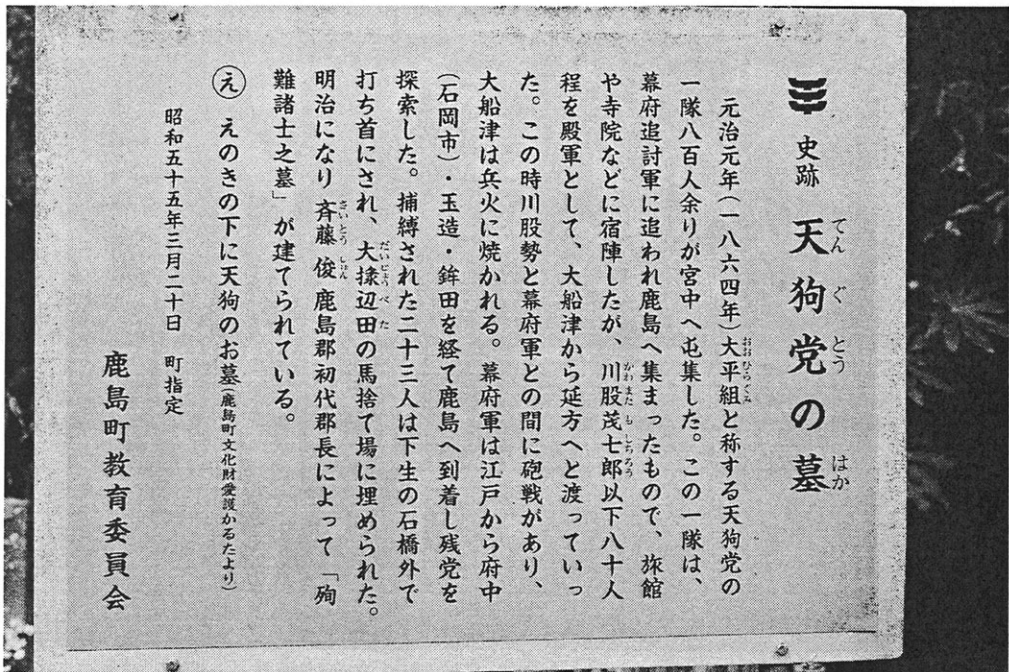


天狗党



潮来市郷土史研究会

鹿島 大掾辺田にある殉難諸士の墓



三 史跡 天狗党の墓

元治元年（一八六四年）大平組と称する天狗党の一隊八百人余りが宮中へ屯集した。この一隊は、幕府追討軍に追われ鹿島へ集まったもので、旅館や寺院などに宿陣したが、川股茂七郎以下八十人程を殿軍として、大船津から延方へと渡っていった。この時川股勢と幕府軍との間に砲戦があり、大船津は兵火に焼かれる。幕府軍は江戸から府中（石岡市）・玉造・銚田を経て鹿島へ到着し残党を探索した。捕縛された二十三人は下生の石橋外で打ち首にされ、大掾辺田の馬捨場に埋められた。明治になり齊藤俊鹿島郡初代郡長によって「殉難諸士の墓」が建てられている。

④ えのきの下に天狗のお墓 鹿島町文化財愛護かるたより

昭和五十五年三月二十日 町指定

鹿島町教育委員会

鹿島落ち

元治元年（一八六四）甲子九月二日より大平組と称する浪士どもが、おいおい鹿島宮中へ繰り込み、三日午の刻過ぎまでには、人数およそ六百余人一隊一隊思い思いの軍装で、旅店はもちろん寺院は兵士で充滿した。

整隊列をなし、威風凛々という美しい行装に驚異の目と見張った郷人は、それが、八月下旬からもっぱら屯集の風聞のあった天狗党の士であることを知るや、市中大いに騒擾し、家財道具を近在へ持ち出したり、又は大きな穴を掘って埋匿し老化婦人を立ちのかせるなど、実に戦々兢兢たるありさまであった。

- 一番隊 隊長 伊藤 益荒 人数 百三十五人
大町 吉野屋と同町中屋亀谷等々分宿
- 二番隊 隊長 林 総七郎 人数 三十四、五人
桜町の松屋へ宿をとる
- 三番隊 隊長 清水 賢祐 人数 二十四、五人
- 四番隊 隊長 桜山 三郎 真田範之助 人数 四十八人
大町 立原 作太夫へ宿をとる
- 五番隊 隊長 西岡邦之助 宇都宮左衛門 人数 九十人余
西岡は角内町の大里彦太夫に宿陣
松信判太夫へ分れて宿陣

六番隊 隊長 熊谷誠一郎 西岡唯四郎 人数 四十余人

熊谷誠一郎は大町吉見屋に宿陣

七番隊 隊長 川俣茂七郎 水野 主馬 人数百十七人

桜町の広徳寺へ宿を取る

その他 十四、五人 二十人位一隊となり九月二日・三日
昼夜の別なく宮中へ繰り込み 総数 六百余人となった。

大掾辺田の天狗党の墓

鹿島で召し捕られた二十三名は、神領外の下生村石橋杭外で打ち首にされ、村々で討ち取った首三百四十はことごとく吟味のうえ野捨てにされた。

川俣茂七郎組 木村 与八 子二十六才

田中 源蔵組 大古 安蔵 三十才

倉上 篠村 重吉 十七才

鉢田村出生 川島 久助

政吉

佐原旅籠屋 近江屋久兵衛

岡部矢一郎組 初五郎

林五郎・三郎組・上州無宿 斉藤釜五郎

倉上 石橋久兵衛

伊藤十一郎組 安田 与八

加代 磯吉

田口 重蔵組

金蔵

黒沢新次郎組

立花 忠八

米川 栄吉組

中島米三郎

只氏 清助

高橋 専蔵

別当

石吉

麻屋 弥吉

八日昼 御小人目付組にて切る 名前知らず 一人

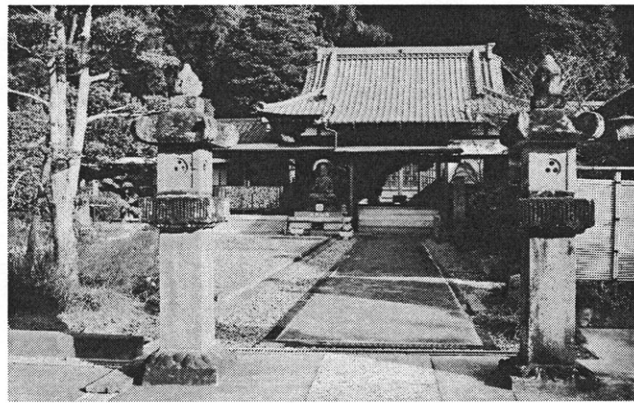
八日夜 滝田尾之助

八日夜 金五郎

八日夜 増田 藤吉

松平周防守組にて切る 名前知らず 一人

根本寺



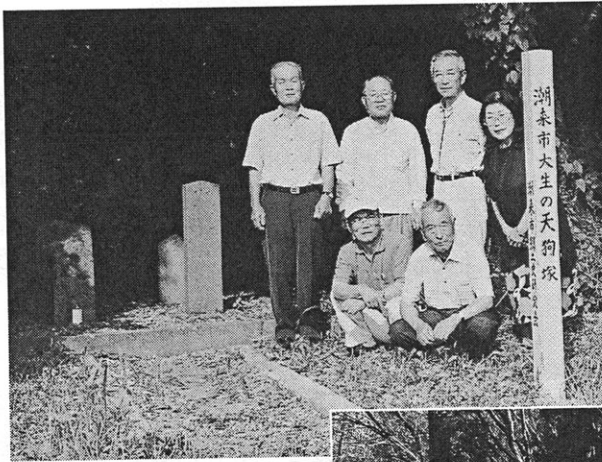
所在地 鹿嶋市宮下 臨
濟宗妙心派の寺 号は瑞甕よう山

六一二年 王都鬼門鎮護のため、聖徳太子が創建したという。宗派は、三論宗、法想宗、天台宗、臨濟宗と変わったらしい。その後、寺は衰えたが一一九一年 源 頼朝により再興された、一二八一年(弘安四)の元寇のとき勅印を与えられ、一三三八年 光明天皇の命により、得蔵が本

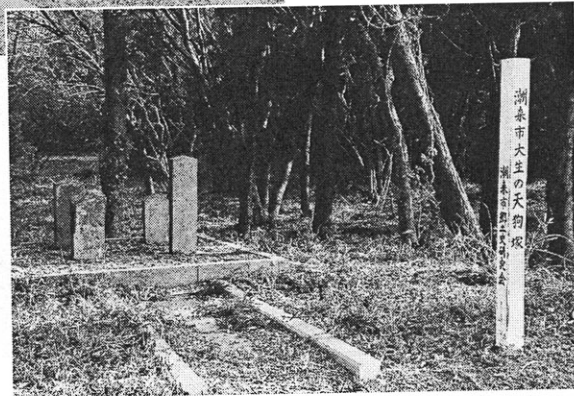
堂を修理し臨濟宗に改宗した。その後足利義詮の寄進を受けたり、鎌倉五山輪番所になるなど、隆盛をきわめた。一六八七年 松尾芭蕉が当寺の佛頂を尋ねている。(鹿島紀行)

本尊は、薬師如束像寺宝類は、一八六四年元治元年、天狗、諸生の争乱のとき兵火焼失したが、後光厳天皇勅願、後宇多天皇勅璽、芭蕉木像佛頂禅師肖像画など現存している。

大生野原の天狗塚



水府村の方五名
供養塔



上の写真は昨年七月五日に撮影したもので、
回天神社代表役員

滝田 昌生氏 他五名の方です

竹内 洵

鶴田 静

新妻 二郎 他

銘文世辞の句

たとい身は

大生野の原にくらるとも

消えざらまはしは 日本魂

水府佐人 榎田 健之助

阿ゆ川や袖をいたして行先は

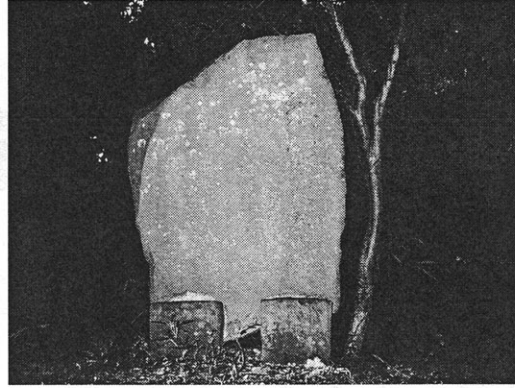
大生野原にて 露ときえにし

水府佐人 中山 倉之助

右以外の三名の方の名前など 不明です

矢幡の天狗塚

行方市矢幡 勤王殉難志士鎮靈之碑



鎮靈之碑

行方郡矢幡村

小嶋 峰 重
片岡 武左衛門
小嶋 新作
小嶋 新七

榎原 助五郎

小貫磯 右衛門

谷田川 安之丞

谷田川 甚兵衛

小貫 芳松

長峰 寅吉

新橋 米吉

同郡清水村

大崎 政治郎

大崎 伊右衛門

大崎 清太郎

大崎 新藏

同郡茂木村

茂木 三郎兵衛

寺門 佐平

同郡根小屋村

平山 茂兵衛

行方郡長

福田 晋書

行方郡岡村

久保田 久藏

箕輪 圓治

同郡宇崎村

小峰 龜吉

鹿嶋郡大藏村

小嶋 傳治郎

小嶋 彦太郎

行方郡藏川村

大槻 正作

行方市麻生

島波の天狗塚

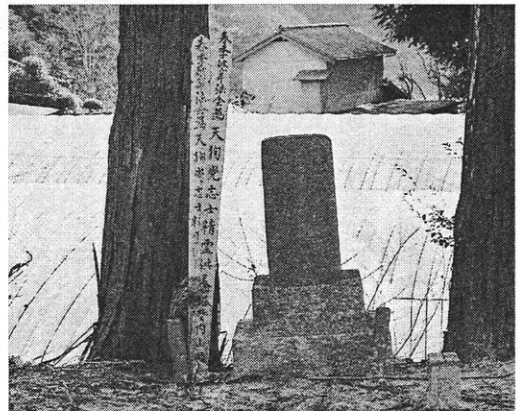


四鹿の天狗塚

二柱

小野 徳寿

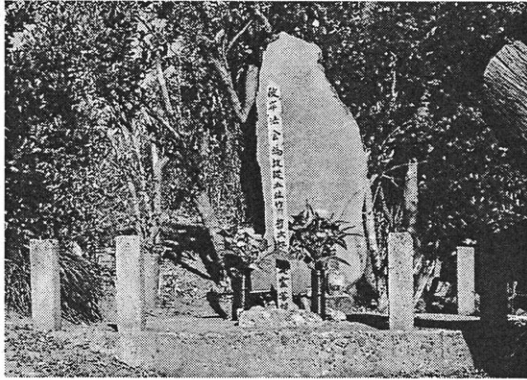
横山 亮之助





井貝いゑの天狗塚
一柱

鈴木 文次郎
元治元年九月八日歿



橋内の天狗塚
五柱

小牧 篤彌
小牧 音次郎
内田 寅吉
大原 庄太郎
票又 己之助

麻生 粗毛の天狗塚
九柱

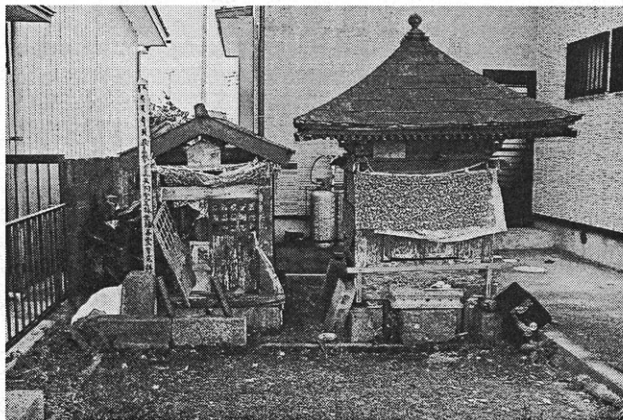
元治元年九月九日歿

天狗塚

所在地 行方市麻生

幕末期に、藩の内外に大きな影響を及ぼした、水戸藩天狗・諸生両派の争乱は、麻生地方でも元治元年（一八六四）九月、一丁窪・青沼原の激戦や、天狗の焼き討ちなどの事件を引き起こしている。

幕府の命を受けた麻生藩は、他藩と協力して、天狗党の拠点であった潮来郷校を攻撃した。麻生藩は多数の天狗派を逮捕しこれを幕府軍に引き渡し、或は、領内にて処刑した、観音様と並んで建つ小祠は「天狗様」とよばれ、逮捕した天狗党士を処刑した所という。

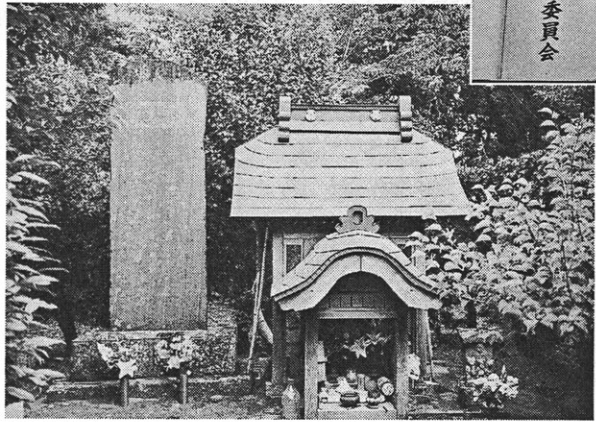


八日市場市指定史跡
脱走塚

明治元年十月六日、当地において水戸藩内郡の諸生派と天狗派の抗争に終止符が打たれた。明治元年十月一日水戸城(茨城県)で敗残兵となった諸生派一行九十余名は、鏡子・飯間を通り十月三日八日市場村(現在八日市場市)に着き福基寺(当市中央地区)に寄った。彼等を逃がした天狗派は、五日夜寺に火を放ち、六日松山地区に逃れた諸生派は、一戦を交えた。この戦いで諸生派三十余名が戦死し、首は盥清けにし竹ヤリに刺して水戸へ持ち帰ったという。首無の死体は村人の手により葬られ「脱走塚」の名称がつけられた。

昭和二十五年三月二十日指定
昭和六十二年十一月

八日市場市教育委員会



水戸藩徳川家略譜

世系	諱	号	生父	誕生	薨去	享年
一	威公	頼房	家康公	一六〇三年	一六六一年	五九
二	義公	光圀	第十一子	一六二八年	寛文一〇・七	七三
三	肅公	綱条	第五子	一六五六年	元禄一三・二	七三
四	成公	宗堯	高松藩重公	一六五六年	享保三九・二	六三
五	良公	宗翰	高松藩重公	一七〇五年	享保三〇・年	二六
六	文公	治保	第一子	一七二八年	享保一五・四	三九
七	武公	治紀	第一子	一七五一年	一八〇五年	五五
八	哀公	斎脩	第一子	一七七三年	文化二二・一	四五
九	烈公	斎昭	第一子	一七九七年	文化三三・九	四四
一〇	順公	慶萬	第三子	一八〇〇年	文政二二・四	三三
一一	節公	昭武	第一子	一八三二年	一八七〇年	六一
一二	定公	萬敬	第十八子	一八三三年	一八六八年	三七
一三	明公	順清	第一子	一八五五年	明治一四・五	五八
一四	敬公	圓齊	第一子	一八八六年	明治四三・七	五八
一五	正公	正	第一子	一九〇二年	明治三三・二	四四
一六	正公	正	第一子	一九二八年	一九九九年	八四
一七	正公	正	第一子	一九五八年	昭和四一・七	七五

耄碌爺徘徊記

—小石川後樂園・六義園・巢鴨界限—

窪谷 悌二郎

十二月五日（金）、潮来市郷土史研究会の諸兄姉の方々に会の研修視察に連れて行って頂いた。行動中は天気恵まれ、晩秋の都内有数の名園の景観を満喫できたことは幸いだった。

景観には、四季折々の風情と云うが、紅葉の後樂園・六義園は初めてであったので、例え、晩秋の盛りは過ぎたとは云え一入であった。眺めている本人も、人生黄昏過ぎの耄碌爺なのだから。

このような皆さんにお伴する旅は、軒先から玄関まで運んで頂けるので楽なことは有難いが、都内では駐車場の関係で見学場所を一周することなどもあり、バスの乗務員にとっては迷惑なこともあり、無駄な時間を費やすことでもある。

首都高速5号池袋線、西神田より下りたバスは、三崎町を通り抜け神田川の「後楽橋」から「外堀通り」へ。この辺りは、旧・水戸藩上屋敷の「表御門」があった処であり、江戸城「小石川御門」があった処でもある。



水戸藩徳川家上屋敷の図

表御門と百軒長屋(左)・百式間長屋の一部。

神田川を挟んで、小石川御門の石垣。

幕末時代の上屋敷は、9万9753坪(約32.9ha)もの面積があったと云う。

名称の「小石川後樂園」、本来は「後樂園」であって、岡山後樂園と区別するために、大正十二年に小石川を冠したものである。国の特別史跡・特別名勝である。

後樂園は、明国の遺臣・朱舜水が、宋の范仲淹（ハンチュウエン）の「士当先天下之憂而憂、後天下之樂而樂」の語から撰び、光圀公が命名なされたこととはご承知の通りである。

個人ではJR水道橋駅より来て入るので、正門（東門）を利用するが、今回は、涵徳亭門、「西門」と通称されている通用門からの入園。ボランティア・ガイドにより説明を受ける。

単身行動に移り、「西行堂」跡から「大泉水」の縁を「寢寛滝」を経て「東門」に、旧書院の「内庭」を通り抜け、「竹生島」を左手に眺めながら「梅林」へ。都指定旧跡である「藤田東湖先生護母致命之處」碑を見て、「八卦堂」跡、「愛宕坂」を下り「円月橋」へ。

円月橋は、朱舜水の設計とか。

当初、後楽園は、中国の名勝や折衷式の建物手法を取り入れ、池を中心に巡遊する、巨岩・奇岩を配した、中国趣味豊かな「回遊式泉水庭園」であった。

現在でも、その名残は随所に留めているけれども。

元禄十五年（一七〇二）九月廿六日、五代將軍綱吉公のご生母・桂昌院が七八歳の御年でこ来園なされた。その際、歩行に危険のなきようと、大部分の巨石や奇石が取除かれてしまっただとか。

これが無かったら、後楽園も「六義園」の優雅さに比べ、一段と豪華さが残されていたことと思われる。

光圀公が伯夷・叔斉の木像を祀るために建てた「得仁堂」から「沢渡り」を渡り「音羽滝」・「通天橋」を眺め「清水観音堂」跡の高台から園内の景観をスナップ。

「屏風岩」を見て「渡月橋」を渡り、「小蘆山」から「大泉水」を西側から眺め、一年に二度咲くと云う「涵徳亭」傍の「冬桜」の下をカメラの三脚を避けて通り抜け出発地点に帰着。



清水観音堂跡からの瞰望

中央橋が渡月橋。(カラーでなくて残念。)

再びバスに乗り「外堀通り」を東へ。水道橋駅前を左折し「白山通り」へ。曲がりきって20〜30mの処、今は道路拡幅のため道路内になってしまったが、この辺りが、藤田東湖が母を助けながら自らは命を落とすことになった跡地である。安政二年（一八五五）一〇月二日の四ツ時（22時）頃、江戸市中を襲った直下型大地震、いわゆる「安政の大地震（安政江戸地震）」の時、藩邸は倒壊した。一旦は母を助けて外に出た。母はその時、火鉢の火が危ないと再び屋内に引き返した。東湖は母を救い出そうとして

鴨居落かゝりけれども東湖大力の人故、老母を下に囲い座して両手を突、肩に鴨居を受けながら片手にて老母を庭前へ投げ出しけるに
『唱義聞見録』

力尽き鴨居の下敷きとなり圧死してしまった。享年五〇。後日『藤田東湖先生護母致命之處』の石碑が建てられたが、再び、道路拡幅のため「後樂園」内に移設され、現在は、文京区教育委員会の「藤田東湖護母致命の処」の標識が建てられている。

そして同時に、斉昭の藩主擁立に奔走し、腹心の家臣として水戸藩の「天保の改革」などを支えてきた戸田忠敵も地震の犠牲となつてしまった。

忠敵は東湖とともに両田と称され、斉昭とその藩政を支えていた、云わば車の両輪であった。両田同時の死は、斉昭にとって大きな痛手となり、以降の藩政に支障をきたすように

なつてしまった。

福井藩主・松平慶永（春嶽）の『逸事史補』には、

水府老公の失政多くなりて、万事不都合を生じ、幕府より譴責を受くる等の事は、藤田東湖・戸田忠太夫兩人、卯年大地震三庄死せし以来也。此二人の輔翼ハ別段の事なりといふ

とある。

この地震での町方の死者は4千人以上、倒壊家屋は約一万五千軒。大名屋敷での被害は、死者約2千人。旗本・御家人宅については実態把握不明であった。

水戸藩では、死者46人、負傷者84人。

大名家での死者100人以上は、二三万石・松平肥後守容保公の会津藩の外桜田の藩邸での死者が139人、次いで、一〇万石・松平下総守忠国の忍藩芝の藩邸で102人。

バスは「白山通り」を北上、「春日通り」との交差点「春日町」へ。「外堀通り」から「春日通り」に挟まれている地域が旧水戸藩上屋敷があった処だ。この近辺、各人の興味・趣味の度合にもよるが、ほつつき歩けば、見て廻る場所に事欠かない。

区指定史跡「樋口一葉終焉の地」を右側に見ながら、西片町の台地の下を北へ。

台地の上には旧「中山道」が通り、この一帯には水戸藩主

齊昭公が交遊記録を『新伊勢物語』として残された相手、老中を務められた備後・福山藩阿部伊勢守正弘の中屋敷があった。丁度、190年前の文政元年（一八一八）にこの地に藩校「誠之館」を建てられた。明治に入りこれらは寄付され、ゆかりの「文京区立誠之小学校」として、名を受け継いでいる。

バスは「白山下」の交差点に。この近傍には、白山神社、円乗寺の八百屋お七の墓、厳浄寺の山口素堂の墓がある。

山口素堂は松尾芭蕉と同時代の俳諧師で親しく交わり、芭蕉の新風（蕉風）確立に大きく寄与したと云う。

日に青葉 山ほととぎす 初がつお

この作品は、初夏の頃、必ずと云ってよいほど見聞きする句である。

70m位で、浄土寺・本念寺入口。浄土寺には松平忠直の墓、本念寺は大田南畝（蜀山人）・山本北山の墓があり、以前『ふるさと潮来』二二輯「ある日の史跡散歩」で書いている。

その時、蜀山人に付いては省いたが、有名な逸話として、蜀山人は大の酒好きであった。あまり深酒が過ぎるので、弟子たちがたしなめたところ、禁酒を誓った。弟子たちは安心して帰ったが、途中、用事を思い出し、戻ってきたら、先生、また酒を飲んでいて。弟子たちがなじると、先生、黙って

わが禁酒 破れ衣に なりにけり

さして下さい ついで下さい

と書き示したと云う。

バスは、旧中山道と合流して、千石二丁目の交差点を右折して、旧理化学研究所前を通り、「本郷通り」に入り、「六義園」近くにて下車、「六義園」正門へ。退職後はじめての来園だから10年以上になるか。此処も秋は初めて。

記念写真撮影後、ガイドの説明を受ける。「内庭大門」前の「六義園八景」の石碑を見る。



六義園八景の碑

霊元上皇から、六義園完成後の宝永3年10月に、園内の景勝地、十二境八景を選び、公家の歌を添えて、柳沢吉保に賜っている。

園内一周。「出汐の湊」から「妹山・背山」を眺め「田鶴橋」から「渡月橋」をわたり「藤代峠」へ。



藤代峠からの眺望

この峠は文京区内で最高点の一つとか。
綱吉將軍の来遊の際、將軍と吉保とが、この頂上で語り合ったとか云われ、頂上に「將軍腰掛の石」と云われる四角い石がある。

峠を下り、「白鷗橋」から「吹上茶屋」を通り「千鳥橋」、池内の「蓬莱島」「臥龍石」を眺めて一周完了。

『六義園年表』を見る。

元禄一六年（一七〇三）、將軍綱吉の子、鶴姫・八重姫、六義園に遊ぶ

とある。

鶴姫とは、綱吉公唯一の実娘であり、ご生母は瑞春院お伝の方である。後に紀州和歌山藩徳川綱教に嫁がれた。

八重姫は、綱吉公の養女であり、御台所・鷹司信子の方の姪にあたる方である。元禄二年（一六八九）のご生誕、三歳で江戸に呼ばれ、九歳で水戸の三代・綱条公の世子・吉孚と縁組し、一〇歳の元禄一一年六月一三日に興入れなされた。

この元禄一二年の年、潮来は従来の板久から現在の潮来に改められた。

六義園にお遊びなされた元禄一六年は、一四歳の時であり、既に吉孚夫人となられている。

八重姫は、宝永五年（一七〇八）二月朔、後に水戸藩四代藩主宗堯夫人となられた美代姫を出産なされている。その月の一日には、八重姫の伯母にあたる御台所・常光院信子の方が御守殿に臨輿なされている。

しかし、八重姫は、二一歳で世子・吉孚と死別し、養仙院となり、幕府より五千両を賜り新邸を建て別居し、養家と婚家の援助のもと五八歳までの生涯を全うした。墓は、上野・寛永寺の塔頭・福聚院にある。

この頃、水戸藩では二代藩主光圀公が致仕し、三代藩主綱條公の治世となった。世は元禄、江戸定府の水戸藩は、江戸の消費経済に巻き込まれ、世子の將軍養女との婚礼と御守殿の新築、江戸藩邸の焼失・再建、將軍の御来臨による御成御殿の新築・饗応、光圀葬礼、將軍ご生母桂昌院御来邸・饗

応、御台所・將軍御息女御臨輿などでの費用の増大、また、地震・水害等の天災により藩の財政は危機に瀕していた。そして、幕府の貨幣改鑄による物価騰貴。

藩は、財政難の応急対策として、以前から、京阪方面の富商からの借入れ、幕府からの拝借などでのいできたが、これでも不足し、ついに、家臣及び領民からも調達するようになった。

家臣からの調達金は、禄高を基準として一定の金を上納させるもので、これを「償金」と呼んだ。償金は光圀の時代から行われていたが、綱條時代には、元録一・一二・一三年、宝永元・七年と多数回に及んだ。

領民からのものは「御用金」と云い、始まりは元録一三年で、將軍綱吉の小石川邸御成りの費用に充てるため、償金と共に領内の裕福な者から取立てた。

元録一三年の時の取立て状況は下表の様であった。

潮来村は南郡に属し、三千兩の平衛門(五丁目年寄・宮本)が領内抛出第一番、千三百兩の庄兵衛(六丁目年寄・窪谷)が二番、五百兩の助衛門(四丁目年寄・石田)・山三郎(三丁目年寄・宮本)が四・五番と並び、合計五千四百八十五兩を抛出し、全御用金額一万六千三百三十八兩の33%も占めていた。

元録13年 水戸領内支配郡別御用金抛出一覧表

「水戸市史」より転載

取扱地区	金額 (兩)	人数 (人)	最高 (兩)	最低 (兩)	主要村名
城下町	1,270	18	300	3	
野々上組	1,905	7	750	55	
松岡組	1,460	16	205	5	内田、釈迦堂、介川、 宮田、田中、高貫等
武茂組	1,573	17	200	20	相川、小砂、馬頭、 大山、石塚、長倉等
太田組	2,173	56	200	3	山方、小貫、天下野、 高倉等
南郡	8,000	39	3,000	3	潮来、小川、宍倉、安食、 海老沢、磯浜等
計	16,381 (16,338)	153			

これは、当時、物資輸送の主力が舟運であったからである。江戸に幕府が開かれ、東北諸藩の産米等を江戸に運ぶには水上輸送、すなわち舟運に頼るの主であった。

当時の潮来は、中継河港として栄え、東北諸藩の蔵屋敷が設けられており、現在の前川沿いには、東から、水戸藩の「上米河岸」、仙台藩の「仙台河岸」、津軽藩の「津軽河岸」、そして「大門河岸」などがあり、潮来の最も繁栄した良き時代の時のことであった、等と思いだしているうちに全員集合、昼食場所に移動。

昼食後、バスで巢鴨の「とげぬき地蔵」として親しまれている高岩寺に移動。「年寄りの原宿」とも云われ賑っているところだ。

高岩寺、宗派は曹洞宗。門前の賑っている通りが旧中山道。この研修後の一二日、文化審議会から「高岩寺本堂」は有形文化財に登録するよう文部科学大臣に答申された。

「白山通り」と旧「中山道」との分岐点にある真言宗・真性寺に「江戸六地藏」の一つが祀られている。

江戸六地藏

享保年間、深川の住人地藏坊正元が大病平癒を地藏菩薩に祈願したところ、病気が全快した。このお礼にと江戸の入口に金箔をはった丈六銅造地藏菩薩六体を建立することを発願、江戸市中勸進、遂に完成させた。鋳物師は神田・太田駿河守政儀

現存するものは五体。いずれも東京都有形文化財・彫刻。

- | | | |
|-----|-----|---------|
| 第一番 | 南品川 | 真言宗・品川寺 |
| 第二番 | 東浅草 | 曹洞宗・東禅寺 |
| 第三番 | 新宿 | 浄土宗・太宗寺 |
| 第四番 | 巢鴨 | 真言宗・真性寺 |
| 第五番 | 深川 | 浄土宗・靈巖寺 |

深川 永代寺（明治初年廃寺、消滅）

裏側から参拝し、染井霊園に。

此处には、岡倉天心・高村光雲・高村光太郎夫妻・二葉亭四迷等の芸術家、幣原喜重郎・若月礼次郎の総理大臣、五カ条の御誓文起草者の福岡孝弟、旧藩主では、松本藩・戸田光則、平戸藩・松浦詮、桑名藩・松平定敬、姫路藩・酒井忠績、高岡藩・井上正順、浜松藩・井上正直、津藩・藤堂高猷等、また、日本海戦で威力を発揮し勝利をもたらした「下瀬火薬」の発明者・下瀬雅允など多彩な方々が眠っておられる。

今回の「郷土史研究会」の会員研修視察に急遽参加をする気になったのは、一月中旬求めた中公新書『幕末歴史散歩（東京編）』に水戸藩主・徳川昭武公の墓が「1種イ3号17側」にあると書かれていたからである。水戸一一代藩主を務められた昭武公の墓が何故、供養塔でもあるのかなと見に来た次第。書かれていた区画には徳川家の墓はなく、離れた所に、水戸徳川家、水戸分家の松戸徳川家、その分家の徳川



田沼主殿頭意次侯の墓

家と三か所に徳川家の墓はあった。昭武公のものは供養塔すらなかった。

しかし、水戸徳川家の墓地には九代藩主斉昭公の御生母・外山氏永の方、松戸徳川家には一代藩主昭武公の御生母・萬里小路睦子の方が眠っておられ、思いがけなくお参りさせて頂けた。

この辺りは、桜と云えば「染井吉野」と云われるくらい有名な桜の発祥の地。霊園内の水戸徳川家墓地の裏手の通称「西そめいよしの通り」の桜の古木並木の下を北に向い、霊園に隣接した臨済宗妙心寺派・萬年山勝林寺へ。

勝林寺には、水戸藩「天狗党」関係者には憎悪の的となっている幕末期の若年寄・田沼玄蕃頭意尊、祖先であり一〇代将軍家治公治世の側用人・老中を務めた田沼主殿頭意次侯の

墓がある。田沼侯は、この寺の中興開基として崇められている。

この寺は水戸藩などとは関係はないだろうと思ひ、寺の沿革などを記した案内書を頂き一読。あった。

水戸藩初代徳川頼房公の准母・英勝院お勝の方（太田道灌曾孫康資女）御寄進の家康公拝領の「三面大黒天像」とあった。

こじつければ、何か縁のものは見つけれられるものだ。

勝林寺は、当初、崇呼山少林寺と云い、鎌倉期の後半に中国僧・一山一寧により湯島の地に開かれ、室町時代には太田道灌、戦国時代には小田原北條氏に各々保護され、寺名も崇呼山正林寺に改められた。江戸期に入り、家康により正林寺は廃され、湯島から駒込の地に移転され、山号も萬年山と改められた。慶長五年（一六〇〇）家康は、関ヶ原の合戦に勝利をおさめると、戦勝を記念して側室の「お梶の方」の名を「お勝の方」と改め、お梶の方がかつて縁のあった正林寺を勝林寺とし、以後、萬年山勝林寺と称するようになった。

元和二年（一六一六）家康公が逝去なされると、お勝の方は英勝院と号され、春日局と共に勝林寺を訪れ、家康公より拝領の「三面大黒天像」を御寄進なされたとのことであった。「江戸切絵図」を見ると駒込では、立原翠軒・杏所父子の墓がある「海蔵寺」近くにあったが「正林寺」となっている。

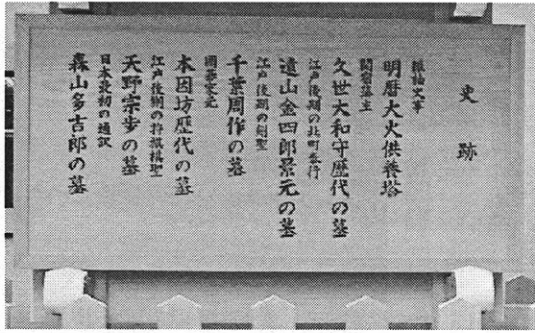
明治に入り「本郷通り」の道路拡張のため墓地のみを染井

の地に移転し、昭和一五年になって、道路新設のため寺全体が現在地に移転させられた。ここには、豊島区指定の平安時代前期の「木造釈迦如来坐像」もある。

勝林寺を出て染井靈園の「西そめいよしの通り」を抜け、日蓮宗・徳栄山本妙寺へ。

本妙寺は、以前は本郷丸山町にあり、江戸時代、江戸の町最大の火事と云われ、江戸城の天守閣をも焼滅させた「明暦の大火」、通称「振袖火事」の火元の寺であり、明治四三年に現在地に移転してきた。

此処には史跡が「案内札」写真のように随分と多い。



徳栄山本妙寺史跡案内札

久し振りの参詣だが寺域内の配置は全く変わり整然としてしまった。

この中で、水戸藩が関係するのは千葉周作。

千葉周作は、陸前栗原郡花山村の生れ。一五歳で父と共に江戸に出て剣術を小野派一刀流を浅利道場で学ぶ。その後独立して北辰一刀流を唱え、道場・玄武館を開き、神田・お玉が池に移り流名を一挙に高めた。

天保六年（一八三五）、水戸弘道館演武場に出張教授をし、次いで水戸藩士に登用された。斎藤弥九郎・桃井春蔵と共に幕末三剣士と云われた。



千葉周作成政の墓

次に、強いて挙げれば、久世大和守広周。

義理の兄弟である阿部伊勢守正弘らと老中を共にし、水戸斉昭らの意向を尊重し幕政にあたったが叶わず、また斉昭らの「不時登城」処分などに反対して辞任。その後、「桜田門外の変」後の閏三月一日に再び老中。老中首座として「皇女和宮降嫁・公武合体」などに尽力するも、幕閣内協力不一致のため辞任。そして、在職中「不束の取計い」あるを以て滅封・謹慎、致仕。更に、処罰され永蟄居、藩主は滅封を受け



久世大和守廣周侯の墓

「不束の取計い」とは將軍家茂公の勅命受諾に対する、不実行。二回目の処罰は、井伊大老横死時、病死と將軍に欺いて報告したことが理由であった。水戸藩が関係したことで随分と翻弄させられ、お気の毒であった。



明暦の大火供養塔

井伊大老は、万延元年三月三日に横死、幕命により喪を秘し、三月三〇日に大老を免ぜられ、翌閏三月三〇日に発喪、四月一〇日に埋葬であったのに、割りを食った処分であった。



遠山左衛門尉景元の墓

隠退后、6時と云う時刻が一日の行動の基準となつてい
る。特に女房の旅立ち後、それが顕著となつてしまつた。

朝6時までには洗濯・朝食を済ませ、出かける時は、駅に
向かう。夕方は夕方で、6時までに食事・風呂の準備を済ま
せて置かぬと落ち着かない。

毎日、毎日「モウ6時だ：」「モウ6時」と一人で騒いで
いる耄碌爺の旧懐ホツキ歩きの徘徊記でした。

そして、この原稿が活字化される頃には丑年。モ―6回目
の丑年を迎えてしまつていのです。

天狗党西上勢・正武隊

軍將井田因幡について

窪谷 悌二郎

平成二〇年戊子歳の年賀状の中に、千葉県山武郡横芝光町の神保先生から頂いたものに添書きがあった。

「新人の井田福治郎さんは、坂田城主井田様の子孫とか聞いております」

と。

神保先生、筆者の別に所属する団体「伊能忠敬研究会」の会員であり、現役時代は県立高校の英語教師、伊能忠敬の父・利左衛門貞恒の生家である神保家一六代の現当主である。

神保家は、古く戦国時代、両総國境の匝瑳・武射地方を支配した井田因幡守に仕え、宿老職を務めていた。

天狗党西上勢正武隊の軍將・井田因幡（平三郎好徳）が、戦国時代末期、神保先生の居住宅から約2km位にある坂田城の城主であった井田因幡守の末裔であることは、以前、神保先生が伊能研究会の会報に書かれていたので承知はしていた。

そして、その末裔の所在などを訪ねていたので、今回、ご教示下されたものと思う。

九月に入り「会員名簿」が送付されてきたので、早速、井田福治郎氏に水戸・井田家の変遷などの教えを請うた。
一〇日足らずで、A3判70枚近くのコピーされた資料を送付して下さった。



多古方面から見た坂田城址のある城山

右手、3本の電柱が見える一帯の屋敷林が神保家屋敷。
伊能忠敬の父・貞恒は300m位城山寄りの地に分家した。

坂田城跡

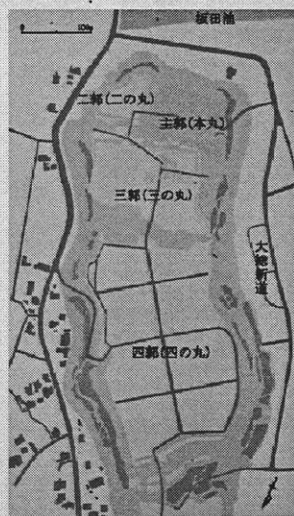
坂田城は戦国時代に、横芝町周辺を支配していた井田氏が築城したと伝えられる、県内でも屈指の大規模な中世城郭です。一般に文献や絵図など資料の乏しい中世の城郭としては珍しく、井田氏の家臣であった神保氏の残した「神保文書」や、江戸時代に描かれたとされる絵図面等が伝わっており、城跡の遺構の残存状況の良さと合わせて県内でも重要な遺跡とされています。昭和57年には千葉県教育委員会により、重要遺跡を対象とした国家補助事業として確認調査が実施され、その成果は「千葉県中世城跡研究調査報告第3集—大友城跡・坂田城跡発掘調査報告書—」として刊行されました。

中世の城郭は、石垣や水堀を多用して主に平地に築かれた近世の城郭とは異なり、土を切り盛りして造られた土塁、土橋、腰曲輪そして空堀等を組み合わせ、古地や丘陵など自然地形を巧みに利用して築城されています。しかし、近世の天守閣や石垣などを持つ城郭に比べ地味な印象を受ける中世城郭は、身近にありながらも余り知られることがありません。このため横芝町ではみなさんに身近な城跡として坂田城とふれあっていただくため遊歩道を整備しました。遊歩道は本丸に当たる主郭から二郭(二の丸)・三郭(三の丸)へまわり、巨大な土塁や幅広い空堀をみなさんの側近に見ていただく事ができます。

坂田城と井田氏

坂田城を築城した井田氏は戦国時代の小領主の一つであり小田原の北条氏に仕えていました。井田氏は元々千葉氏の家臣でしたが、現在の芝山町にある田向城へ居城を構えてから次第にその勢力圏を拡大、田向城の北東にある大台城にその居城を移しつつ周辺の小領主達を従え始めました。しかしながら当時の井田氏の勢力からみて坂田城は余りにも巨大であり、当時、安房の里見氏と小田原北条氏の対立する状況にあって、井田氏以外の北条氏よりの武士団がいざという時に頼れる拠点として作られたのではないかと考えられています。このように井田氏は小田原の北条氏と同盟関係を結び、豊臣秀吉による小田原攻めに際しても北条方に味方したため、北条氏の滅亡とともに坂田城は廃城となりました。

平成9年3月横芝町



千葉県山武郡横芝光町 坂田城跡 案内板

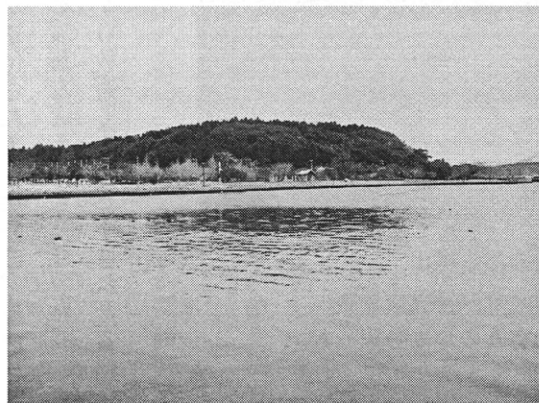
戦国時代の台地城郭跡であり、規模の広大さと縄張の巧みさで、東総を代表する城跡である。

右上、坂田城址・本丸址の土塁遺構

右下、本丸・三の丸間の空堀遺構

下、東側、坂田池越しに見る城山

城山・坂田池の一帯は公園として整備されている。(城山の梅まつりが有名)



これらの資料を抜粋して、天狗党西上勢正武隊々長・井田因幡（平三郎好徳）の家系の変遷について列記して見る。

井田氏は、桓武平氏・平良文の流である千葉一族とも云われているが、出自・発祥地などは不明。

井田氏の系譜を知るには

一、『小官山楓軒文書纂』（国立公文書館内閣文庫所蔵）

二、『坂田・小関家文書』（横芝光町坂田・小関家文書）

があり、平成七年に横芝町教育委員会から発行された

坂田城跡総合調査報告書（史料調査）『上総井田文書』で

もこれ等を並立して紹介している。

要約すると、

戦国末期、井田家は、千葉氏に属し、また、小田原の後北條氏の被官ともなっていた。

天正一八年（一五九〇）、豊臣秀吉の小田原征伐により、豊臣氏の全国統一は成され、この地方は徳川家康の支配する所となった。北條氏の敗滅とともに井田因幡守胤徳は、坂田城をはじめ所領を収公され、旧領内に隠棲した。

文禄元年（一五九二）三月、下総・佐倉に徳川家康公の五男・武田信吉が四万石で封じられると、井田因幡守は仕官した。

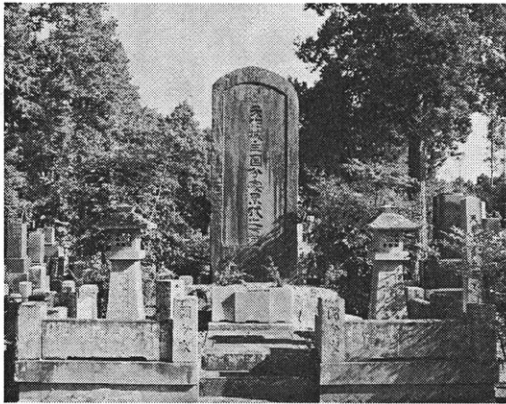
慶長七年（一六〇二）、武田氏が常陸國水戸へ一五万石で転封するに従い、井田氏も水戸領に移徙し、知行高二〇〇石

を給された。

翌慶長八年九月、武田信吉は病死し、一月には、家康公一〇男・頼宜が二万石で新たに封じられた。以後加増があり慶長一四年に駿河・府中に五〇万石で転封し、後に、家康公一男・頼房が二五万石で常陸・下妻から移封してきた。

このとき、武田氏の遺臣の多くが頼房に仕えることを許され、井田胤徳も旧知二〇〇石にて再仕官し、大番組に属した。

これと時を同じくして両総地域からは、千葉氏族の旧矢作城主・國分氏や、香取神宮の神官の末裔である香取氏等も水戸・徳川家に仕官した。



矢作城主國分氏の墓

國分氏は、千葉常胤の5男五郎胤通を始祖とする千葉六党の一つであり、葛飾郡國分郷を領し、國分氏と称し、後、所領のあった香取郡矢作に城を築き居城とした。

水戸谷中・常磐共有墓地内



水戸・香取家の墓

九代助十郎安仁は、250石を給され江戸詰小姓頭取などを勤めた後、水戸勤となり町奉行を勤めた。

水戸谷中・常磐共有墓地内

『井田氏系譜』

○上総武射郡坂田城主井田因幡守

初同郡山室城主後同郡大台城主又坂田城ニ移ル

光台院殿天慶成運大居士 永録八年三月九日卒

二代井田氏 天正一八年小田原同時落城

井田刑部

世々上総坂田ニ住北條氏ニ仕

①因幡胤徳

初北條氏ニ仕 天正十年壬午十二月氏政ヨリ付属ノ著到文書ヲ伝 北條亡シテ万千代君ニ仕 二百石ヲ賜万君古帳 慶長中威公ニ仕旧知ヲ賜役名未詳 十七年壬子十二月九日死

②治大夫

父死シテ二百石ヲ賜大番組 元和中先手足輕頭 元和九年寛永三年上洛ニ此役ヲ以テ扈從セリ 百石ヲ加ヘラル寛永三年大帳 寛永中持筒頭足輕三十人ヲ附属ス 寛永十一年上洛ニ此役ニ從ウ十年 又百石ヲ加ヘラレ四百石トナル後旗奉行 正保三年丙戌六月廿五日死

喜大夫 三代目家督

佐野源左衛門貞猶 將監ノ養子

治大夫吉道 母妾 兄喜大夫ノ養子、四代目家督

甚五左衛門 母同上 源英公ニ仕 後致仕シテ土井能登

守利房ニ仕

③喜大夫

母望月五郎左衛門女 初名九郎兵衛 寛永中二百石ヲ賜書院番組 父死シテ四百石ヲ賜正保年中知行割 慶安中先手足輕頭 万治二年己亥四月廿五日死四十歳

④ 治大夫吉道

参四郎好典

初名所左衛門 大炊頭頼雄君二仕 兄ノ養子トナリ

女子 母中山備前守家土川島市次郎某女 早世

三百石ヲ賜大番組 万治三年庚子供番組 寛文三年

女子 母同上 為祖父好近養女

癸卯大番ニ復シ使役ヲ兼 十一年辛亥七月廿八日死

嫁飯島勘次郎道行

女子 大嶺庄左衛門言広妻

平三郎好礼 母同上 父早世ニヨリ「嫡孫承祖」

女子 佐野源左衛門貞勝妻

⑦ 平三郎好礼

⑤ 治大夫好道(直)

女子 母木名瀬庄三郎伯母 寛助五郎久道ニ嫁

初名所左衛門 父死シテ二百石ヲ賜大番組 元禄五

源八郎好高 実ハ林五郎左衛門某二男

年壬申使役ヲ兼 十六年大番組頭 宝永元年目付

女子 母同上 養子好高二嫁

六年寄合組 十月又目付トナル 正徳中先手足輕頭

⑧ 源八郎好高

女子 母嫡女 斎藤市良右衛門ニ嫁

享保十三年四月七日死

平三郎好徳 母同上 平三郎 後因幡卜改

女子 母木内五郎四郎正忠女 伴茂左衛門重形妻

⑨ 平三郎好徳

右馬五郎好嗣 井田総蔵某次男

平三郎好繁 母同上 先父死

女子 養女養子好嗣ニ嫁

浅衛門好安 母同上 宝永五年小十人 後追放セラレ

女子 実ハ斎藤市良右衛門次女 母ハ好徳ノ姉

吉三郎高景 母同上 村上源五郎高任養子

小三郎好近 後治大夫 実村上源五郎高景次男

こゝで『楓軒文書纂・井田系譜』は途絶えている。
次の六代からは『坂田・小関家文書 井田系譜』を参照する。

九代目平三郎好徳は、天狗党西上勢で潮来地方から多く参
加した、所謂、潮来勢、これを義勇・正武隊の二隊に分け、
正武隊を率いたその人である。

⑥ 治大夫好近

参四郎好典 母大森総衛門近智女 父二先立ちテ逝去

某 母同上 早世

水戸に移徙し威公に仕えた初代因幡胤徳は二〇〇石、次の治大夫某は四〇〇石となり、三代喜大夫某も四〇〇石を給された。四代治大夫吉道は、順養子であつたため三〇〇石となつた。五代治大夫好直は二〇〇石を給されたが、嫡子に先立たれ、養子家督となつた。その後、不幸が続き、養子家督を重ねるごとに家録は減少し、八代源八郎好高の家督時には、天保十一年の『江水御規式帳』によれば、御徒目附十五石四人扶持となつてしまつてゐる。

この間、七代平三郎好礼は文化七年（一八一〇）一月、祖先の旧地である坂田を訪れ、遠祖の墳墓を詣で、旧臣の末裔等に面会してゐる。

そして、九代目平三郎好徳。

弘化元年（一八四四）四月八日、父・源八郎好高逝去により、三歳にて家督相続。幼名、鍼之助。

このため、祖先の坂田城主時代の旧臣の末裔である坂田郷市場村の名主・小関八郎左衛門が、水戸に赴き養育した。

後日、小関八郎左衛門徳恕は『井田好徳文書籍書』に次の様に書き残してゐる。

旧主好徳君、幼ニテ父母ヲ失ヒ祖母ニ育テラレ、成長ニ從ヒ文武ノ道ニ達ス。身幹勇壯、御年十一歳之時ヨリ臣八郎徳恕水府ニ罷出守伝、水戸烈公斉昭卿之命ヲ以而、十八歳ヨリ御目附役ヲ奉ル。又中納言慶喜卿御上洛役ヲ御供ス。

文久四甲子年水戸戦争、九月八日、湊御殿陣ヲ引払ひ、武田伊賀守正生ヲ始大将分八人、騎上ノ士二百騎、卒千余人上京道之數戦、中仙道筋ヨリ木曾路へ至リ、江州迄登降リ有リ。越前敦賀へ抜け出シガ、加賀藩主へ落去、終二本意ヲ遂ス。翌年同所ニ於テ自害。

至誠院殿正典忠因大居士 神号井田威名彦命

上総國武射郡坂田領井田因幡守ヨリ十一代之胤也。

大将之内、依神号ヲ称ス。古法名ハ越前ヨリ送越シタ儘弔拜受ス。年号改元治元年、翌牛年二月四日、越前敦賀泰勝寺ニ葬ス。明治元年七月、天朝命有テ水戸三夜廟所ニ改葬ス。御差料山城大椽國重ノ刀、略御系図拜納置候也。一枚ハ御先祖代々之御尊命御法号ヲ記ス。子々孫々ニ至ル迄不可怠尊敬。

臣小関民部十代之胤

小関八郎左衛門徳恕 謹書

この遺文で疑問に思われるのは、井田平三郎が自害となつてゐること、改葬のことである。旧臣下の末裔としては斬首されたと書くには忍び難いことであつたのだと推察する。

改葬については、常磐共有墓地（水戸三夜廟所）にある水戸・井田家累代の墓所には「招魂碑」として建立されてゐる。



水戸・井田家累代の墓

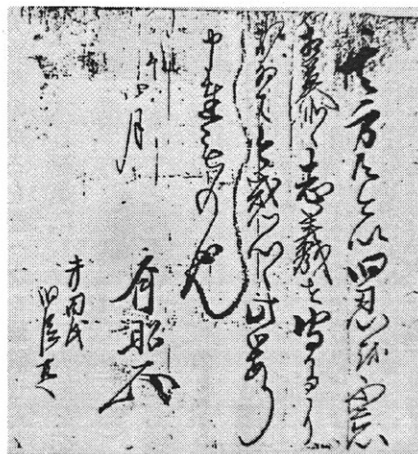
左側、3本の木の下にある大振り
の石碑が、井田平三郎好徳の招魂碑



天狗党殉難者の墓

越前敦賀・松原神社内

其方共今以旧恩を不忘相慕候、志義を守るに
おゐて今感心候、此段申達もの也
午
四月 齊昭
井田氏 旧臣共へ



伝・徳川齊昭公判物

また、小関八郎左衛門徳恕の遺した「井田好徳文書箱」には、次の文書類が在ると云う。
小関八郎左衛門は、嘉永五年（一八五二）から、好徳が小普請組に出仕した安政五年（一八五八）春までの間、水戸の井田家に在って好徳を養育した。好徳が出仕を果たしたので帰郷するのだが、この時、藩主齊昭公より左記の判物を賜ったと云う。

好徳は、安政五年（一八五八）、小普請組に出仕。次いで、安政六年、一八歳で御徒目付となった。文久元年（一八六一）、「勅返納」事件に連座して小普請組に落されたが、再び、前職に復帰した。

文久四年は、遠祖井田因幡守友胤の三百年忌の年であった。

文久四年（一八六四）二月二十日、元治元年と改元。

三月九日、好徳は祖父・七代平三郎好礼が文化七年に、祖先の旧地である坂田を訪れ、遠祖の墳墓を詣で、旧臣の末裔等と会しているように、自分も坂田郷の遠祖の墓参等を願出て、許され実施している。一行総勢十八人。

墓参の後、旧臣末裔宅を歴訪、祖先崇拜の鎮守参詣などを済ませ、十一日には、旧臣末裔六十余氏参集のもと遠祖三百年忌法要を営み、帰途に就いた。途中、前述の坂田郷市場村の名主・小関八郎左衛門宅に寄り、井田氏歴代の系譜などを託し、水戸へと帰って行った。

この一〇日程の後の元治元年三月二十六日に、田丸稻之衛門・藤田小四郎らが筑波山に挙兵した。

好徳は、宍戸侯・松平大炊頭頼徳の水戸藩内騒乱鎮撫の任に従った。那珂湊の役・大貫村の戦闘で、潮来勢を率いていた潮来文武館々長・林五郎三郎正徳が戦没したのに伴い、その部下を朝倉源太郎景行と共に引受け転戦している。

次いで武田・筑波勢と合流して、武田耕雲斎を総大将とす

る天狗党西上勢の正武隊の軍将となった。

西上勢、越前・敦賀までの苦難の道、幾度かの小競合いを強いられたが、中でも大きな戦闘としては「下仁田の戦い」が挙げられる。『水戸幕末風雲録』より

高崎藩の兵は曩に筑波山下なる下妻にて波山勢の夜襲に散々の目に逢ひたることあれば會稽の耻を雪がんものと、天狗勢の来るを邀へ之を撃破せんと欲し、軍を三隊に分ち、十六日健氣にも攻撃の火蓋を切ったが、天狗勢は虎勇（三橋半六）正武（井田平三郎）義勇（朝倉源太郎）の三隊を以て之に應戦し、突撃奮闘、終に高崎兵は三十六人の戦死者を残して大敗潰亂した。

潮来勢から成る正武・義勇の両隊の活躍の様子が描写されている。

次の「和田峠合戦」では、潮来勢では唐津俊藏の名が出てくる。

そして、十二月十一日、新保宿に着到。二十日、降伏。二十三日、敦賀へ移送、三寺院に收容される。

明けて元治二年（四月七日、慶応元年と改元）、二月一日に吟味が始まり処分が決定された。

四日、早くも二十四名の処刑が始まり、井田平三郎好徳は十一番目に斬首されたと云う。

処分の申渡しは次の様であった。『水戸幕末風雲録』より
其方共儀、其筋より申付を受け松平大炊へ附添ひ水戸表

へ罷越上は最初戦争に相成筋得と事柄相尋べき處、常々市川三左衛門等の所業主人爲筋相成間敷と存じ居候所折柄にあるとて、大炊一同武田伊賀へ随從、所々集屯御討手並に主家へ敵對致し、剩へ大炊へ附添ふ上は同人降伏致す節一同罷出べき處、其儀なく猶伊賀一同御敵對致し、其上主家縁邊へ相便るべしと軍裝を以て、暴行國々動亂致させ農民を惱す段大法を犯し、容易ならざる所業に及ぶ始末、公儀を恐れざる仕方重々不届至極に付、嚴科に處せらるべき所、追て右次第恐れ入候義と心付、加州勢へ降伏致すに付、格別の御宥免を以て斬罪申付るもの也。

この様な申渡しの下、三百五十二人も多くが斬首された。

井田平三郎好徳、潮来地方とは直接関係はなかった。恐らく来たことも無かつたのではないだろうか。

潮来郷校、所謂、潮来文武館の館長・林五郎三郎正徳に率いられて元治甲子の乱に参加した潮来地方の多くの農民、正徳亡き後、好徳が関わり敦賀まで行動を共にした者もいる。

この事を知った後、井田平三郎に付いて興味を抱き、今回、ようやく少しは井田氏のことを知ることが出来た。

明治に入り、小関・寺田・萩原などの旧臣は、越前・敦賀まで赴き、好徳らの墓を詣で、遺品の辞世の詠を持ち帰ってきた。



井田平三郎好徳 辞世詠

この辞世は、『水戸幕末風雲録』などに掲載されていない。明治に入り早い時期に、坂田郷の旧臣末裔らが持ち帰ってきたからか。

兼てより
思い定て
君か為 かくなれば
こそ
武士の道
好徳書

《天狗党一口メモ》

回天神社に祭祀されている現・潮来市区域からの「水戸勤王殉難志士」数は、左表の通りである。

村名	殉難者数
潮来村	51
上戸村	37
辻村	9
牛堀村	8
島崎村	8
堀内村	8
永山村	7
延方村	7
清水村	4
茂木村	2
大洲村	1
計	142

この回天神社に祭祀されているのは、幕末期の安政の大獄から戊辰戦争にかけて、所謂、天狗と称された派に組み、その時々の変遷に奔走し殉難された方々である。

昭和八年に、現・回天神社の「忠魂塔」が築造され、左右裏面に千七百八十五名の殉難者が刻名された。

平成に入ってから、第一・二・三次と八十柱を合祀し、合わせて千八百六十五名の方々をお祀りしている。右表は、その中の百四十二名である。(七・六%)

百四十二名の方々の内、天狗党西上勢に加わり越前・敦賀までの苦難の道を歩まれ、刑に処せられ、獄死され、また、送還され水戸で獄死なされた方々の数は、次の様になっている。半数近くの方々が西上勢に組みし歿せられたのだ。

『水戸幕末風雲録』、『幕末維新全殉難者名鑑』参照

村名	処刑		水戸	送還途中病死	計
	処刑	獄死	獄死		
潮来村	23	3	2		28
上戸村	14	3	2	3	22
辻村	2	1			3
牛堀村	2	1			3
島崎村	3				3
堀内村					0
永山村	1	3	1		5
延方村	2				2
清水村	1				1
茂木村	1	1			2
大洲村		1			1
計	49	13	5	3	70

天狗党西上勢、新保宿での白熱した軍議の末、降伏を決し加賀藩に投降した、人員八百二十三名。

後、幕府へ身柄を引渡され吟味され判決が下された。

死罪三百五十二名、遠島百三十七名、構いなく追放百八十七名、水戸渡し百三十名、永厳寺預け十一名。

死罪を申渡され、斬首されたもの三百五十二名。

内、潮来市区域からのもの四十九名。

実に十三・九%の多きにあたる。

庚申山登頂

今泉清衛

私の住む横須賀には、昔から庚申講という信仰が伝承されている。子供の頃よく大人達が夜集まり、酒を飲み、大声で騒いでいることがあった。いま思うとあれが庚申様の行事であつたのである。

庚申講とは、「庚申の日」に当番の家に集まり、帝釈天青面金剛 猿田彦などの神を祀り、夜を徹して過す行事である。横須賀では七・八名から十名前後の同志が集まり行なっている。組織は本家格、分家格とか気の合つた者同志で講が組織されている。私も戦後近所の講に仲間入りをしたのであるが、当時は庚申講の意味もわからず、庚申の日に集まつて行なう信仰行事である位の考えで、飲んで騒いで過ごして来たのであつた。

庚申講の当日は、当番の家を宿にして酒盛りが行われる、当日の御馳走はすべて当番宅で用意するのであるから、当番宅は当日朝から、材料の仕入れに、煮付物作りに家族総動員にての大忙しである。

当日使用する膳椀は講中にて購入してあり、上番下番で引継がれる、その外に小箱があり、猿田彦大神、青面金剛画像

の掛軸、講中名簿、預金通帳などが入っている。小箱は藁のコモで巻かれ、柵をそえて三か所を結んである。藁コモは年末最後の当番が、新藁で新調して新年度の当番に引き渡す。

新年度の庚申を「初庚申」と言う。

さて庚申講当日の料理は精進料理で、農家の作物が主体で、農村らしく素朴ではあるが味も良く、量もたつぷりの自慢料理である。膳は本膳、二の膳付きの大名膳である。本膳は平椀、角皿、壺椀、飯椀、汁椀である。一方の当番以外の講中は、「よばれ組」と称し、午後の三時頃わざと腹を減らし我が家を出て、のんびりと当番宅に参るのであるが、この気分はまた格別で呼ぶ者、呼ばれる者の心が通い合ったものである。

当日当番は、床の間に掛軸をかけ小さな模擬本膳を供え、三宝には賽銭を供える、実はこの賽銭は講中が年に一度の一泊二日の旅行の積立金である。座は高齢者より順々に並び、宴は当番の挨拶から始められる。尚当日の経費はすべて当番の全額負担である。酒も程良く回り歌やおどりも出てきて、夜の更けるのも忘れる。やがて宴も終り解散となるのであるが、残り物の料理は折箱に詰めみやげ物となる、酔った体に吹く川風の心地良さは、また格別なものであつた。

戦後の激しい移り変りは、農村もとり込み環境をも大きく変えてしまった。遠く江戸時代から伝承されて来たであろう庚申講の行事も、現在は存続不能となり、中止のところも出

てきた。私の所の講も、参加者わずかに三軒となり手作りの料理も作らず仕出し、すしなどを取り寄せ細々と継続している始末である、明日の勤めの事も考えるとやむをえない事であらう。

もう二十五年も昔の事であるが、庚申山登頂参拝の失敗談を申し上げてみたい。庚申山本宮が栃木県の足尾町にあると聞き一泊二日の旅行で参拝する事になり決行する事と成る。

昭和四十九年十月中旬観光バスにて一路日光を目ざす、(末尾の地図参考)今市・日光經由で一二二号線を走り日足トンネルを抜け、足尾銅山跡を右に見て、渡良瀬溪谷沿いを下り、遠下地区より右折して、庚申山登山道三九三号線に入る。庚申川沿いの登山道は県道から細い道となり、途中足尾温泉郷を通過進む事一時間余、登りつめたところが車道終点であった。家らしいものは、庚申山社務所が一軒あるだけの淋しい所である。

社務所の前で一休みした後、高齢者と女達を残し元気な若者六人で代表登頂参拝する事になり、地下足袋に軽装身支度を整え午後二時頃勇躍出発して行つた。今にして思えば、山の標高も状況も調べず聞かずで、その辺の山にでも登るような軽い気持で出発した事は実に無暴そのものであった。

一八九二メートルの山は厳しい。六名は先を争うように元気で登り始めたが、行けども、行けども頂上らしき所は見当たらない。山道はだんだんと険しい急坂となり、道はいよいよ

よ狭く熊笹が胸までも生い茂り本当に熊が出てきそう、道は渡良瀬川の源流の谷間をたどること約一時間余。

晩秋の日も早や西に傾き始め、山頂・本宮は、どの辺になるやら位置もこれからの所要時間も見当がつかず、心細くなり一同小休止を取り相談をする。不安と疲労が一度に全身をおそい、この状態では登頂参拝は無理と判断、残念だがあきらめて下山する事となった。

バスの位置に着いたころは、もう夕闇が迫り、首を長くして待っていた残留組の人達にひどく叱られた。今、思い出しでもよく無事に帰られたものだと思う。夕闇の中を宿泊地である鬼怒川温泉地へと向う。

あれ以来庚申山登頂参拝は再開する事は無く終った。もし登頂参拝する者は、山の近くに宿をとり、時間をかけて登れば成功すると思う。二千メートル級の山の恐ろしさと、昔びとの山獄信仰の厳しさを痛感させられた。

最後に庚申信仰とは如何なるものか、何時、何処からどの様にして伝わり、広まったものか、「歴史と旅」を参考に書いてみよう。

先ず「庚申の日」について今の若い人は、あまり知らないかも知れないが、昔は甲乙丙丁などの「十干」と子丑寅など「十二支」を組み合せて、年や月日を呼んでいた。その組み合わせは六十種類あり、庚申の日は六十日毎に巡っている。年に六回多い年は七回となる。

『庚申の日には当番宅に庚申の仲間が集まり、庚申様を祀り夜を徹する風習が日本各地にみられた、これを庚申信仰という。』

神社の境内や路傍などに庚申塔が建てられている、形態は千差万別である、種々さまざまな神々が祀られて居て、民間信仰とも密接なつながりがある事が感じられる。地域によつて祭神が多くその御利益も多く、庚申様最大の御利益は不老長寿である。

庚申信仰は、古く中国より道教の「三戸」説に由来するものである。(末尾の三戸図画参考)

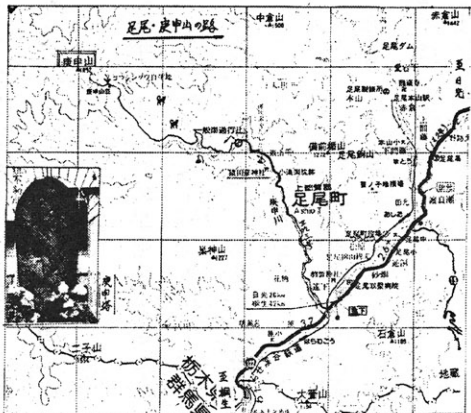
三戸とは虫の仲間である人間の体内に住んでいると信じられた、霊的な存在である。その三戸が人間の体内に住み、日夜絶え間なくその人の行動を見張っていて、庚申の夜になると熟睡した人間の体内から抜け出し上天して天帝に人間の悪事を報告する。それを聞いた天帝はその罪状の重い軽いを判断して、寿命を縮めたり時には命を取ったりする。悪い事をしてなければ、天帝に報告されることはない。だが、人間というものは大なり小なり悪い事をするものだ、長生きを望むならば庚申のその夜は寝ずにいて、悪事を告げ口する三戸を天に昇らせないようにする必要がある、長生きのために三戸が抜け出すのを徹夜して防ぐというわけである。

この考え方が中国より奈良時代に帰化人や僧侶などにより伝わっており、平安時代には宮廷貴族達が夜を遊びで過ごし

た「庚申御遊」と言う言葉も生まれ、ともあれ庚申の信者達は寝ずに過ごす。とはいえ一人で一夜を寝ずに過ごすことは難しい。そこで自然と仲間が集まり共同で庚申をするようになる。それを組織化したものを庚申講と言う。寄り集まって何をするかは講によつて違う、大抵のところは特別に行的なことはせず、ただ集まって飲食し、雑談などをしながら夜の明けるのを待つのであるが、近頃は人々の生活も忙しくなつて徹夜とは参らず、夜半ぐらいでお開きにするところが多い様である。』

庚申信仰は無病息災、不老長寿を念じる庶民の切なる願望の表現でもあり、また娯楽の少なかつた昔の人々に憩いを与えるものだったのかもしれない。

〔三戸〕「玉函秘典」より



茨城県 県指定有形文化財

二十三夜尊堂

概要と特徴

十二月末に二十三夜尊堂の工事が無事終わりました。小ぶりながらも珍しい建物なので紹介します。

秋 永 守

【概要】

名称 二十三夜尊堂（旧延方学校聖堂）

所在地 茨城県潮来市辻一九七七

構造形式 桁行三間 梁間四間 入母屋造 銅板葺

主要寸法 桁行五、九一〇メートル

梁間四、八四八メートル

平面積二十八、六五二平方メートル

建築年代 文化四年（一八〇七）

移 築 明治十一年（一八七八）

指定年月日 昭和四十九年三月三十一日

工事期間 平成十八年八月一日から

平成十八年十二月二十八日

二十三夜尊堂は茨城県の南部、潮来市の鹿嶋に抜ける旧街

道沿いにある。元々、この堂は、文化四年（一八〇七）に水戸藩の教育機関として現潮来高校（延方内田山）の場所に建てられた旧延方学校（後に郷校と改名）の聖堂である。文化十四年（一八一七）には水戸藩主徳川斉修公が自ら篆書した「至聖先師孔子神位」の木牌を祀っていた。明治五年（一八七二）廃校になり、明治十一年（一八七八）、地元の有志が買い受け、月読神社の社殿として現在地に移築された。

月読神社は江戸初期よりこの地区の住民より信仰が受け継がれてきた民間信仰の場で、勢至菩薩の他に妙見様、清正公様、観世音菩薩、月読尊を祀っている。月読神社は二十三夜尊堂であり、特に宗教団体ではなく、地区で選ばれた総代が管理運営し、毎月旧暦二十三日には例祭が行われている。

堂は移築に際して側廻りの礎盤を廃し土台立ちとし、内部は床を組み板敷きとした。その際、開口部及び外陣脇陣境の内法貫を撤去していた。粽付の円柱、詰組、扇垂木等の禅宗様の手法を用いながら、円形断面の化粧垂木、丸身をおびた棟木や梁等の部材を用いている。内陣を高い化粧屋根裏天井、四周側廻りを半円形のむくり天井にする。などの特異な手法を用いている。

昭和三十四年頃に外部をペンキで塗装し、平成十二年に鉄板から銅板葺に葺き替えた。

今回の工事では、まず外部板壁の補修を行い、ペンキを剥離した。その過程で、もともとは塗装のない素木の建物と

解った。現状のペンキは顔料(赤・青・白)を希釈しオイルステンのように希釈したもので、風蝕した肌肌の上に直接塗られていたため、塗料が木目に入り込んでいて、剥離剤を使用したがペンキの除去は困難をきわめた。サンドペーパー等で表面を削ったが、部材の形状が変わってしまったため完全に除去はせずに一部ペンキを残した。所有者が木部保護のために塗装を望んでいることもあり、古色塗りをすると考え全面に木材保護料(キシラデコール#一〇五カスタニ)を三回塗りした。竣工後は、残ったペンキを目立たなく、塗料のテカリはあるものの修理前よりは落ち着いた仕上がりとなった。たまたま、実績報告書を提出に行った日に一月の例祭が行なわれていた。竣工後初めての例祭であったが、参拝者も特に違和感もなくお参りされたようだった。

【主な特徴】

化粧垂木

扇垂木で地垂木、飛檐垂木とも丸垂木である。修理中に抜け落ちたものを見ると飛檐垂木は木負けに大入れ柄差しで、上部の化粧裏板、茅負の取り付く部分は平らに削っている。地垂木も同様に上部を平らにし、丸桁に載る部分も平らに削っているようだ。

側廻り天井

四周を回る天井は半円の起り天井とし、配された丸断面材

が一見あばら骨のようにみえる。四隅は留めとせず、正面、背面通りが端まで通り、側面通りが二間の短い間となっている。

内陣天井

中央の柱は棟持ち柱とし、途中梁間方向の指物、差肘木、貫をうける。天井は化粧母屋、棟木に化粧垂木を架け、化粧裏板天井としている。

藁座

正面の三間にはすべて棧唐戸が入っているが、隣同士藁座を一木で造出し、柱にまたがり釘止めとしている。上の藁座は打ち直されているが角釘打ちで、当初材だと思われる。

摩伽羅

棟に載る鯨に似たもので、二十三夜尊堂では珍しく外を向いている。現状取り付いている摩伽羅の他に堂内に三種類四体の摩伽羅が残っていて、その内一体の胴の柄穴から「嘉永紀元秋〇〇」の墨書が見つかった。丸釘の補修部分もあるので移築した後、明治後半以降にもこの摩伽羅が載っていたようだ。ちなみに、摩伽羅は鯨に似ているが、インドに原型を持ち頭が龍または鱗といわれる想像上の動物で、アジアでは門や屋根に魔除けとして飾られる。黄檗寺院の万福寺の屋根にも載っている。

江戸後期 水郷潮来地方に

おける結婚の一考察

—常陸国大洲村の人別帳の分析を通して—

石 津 藤 好

はじめに

六月は、観光の街潮来が最も賑わいを見せる時期の一つである。この時期ほど、アヤマの花に象徴され、そして、前川や北利根川に代表される水の豊かさをしみじみと感じる季節はない。

今回、江戸時代の結婚・離婚について地元資料を再度読み直し考察したわけであるが、かつて、大洲地区の生活に重大な役割を果たしていたであろう「川」との関わりを改めて認識させられた。結婚と一言で言っても武家社会の結婚もあれば、それとは当然様相が異なっていたであろう庶民の結婚もあつたわけである。水郷地域の史料を取り扱うことの意味と、新史料の開拓をすることの重要性を思いつつ資料を読み進めた。

血縁関係で結ばれた家族間の行き来は冠婚葬祭が多く、且つ、それが庶民との交流場となっていた当時の社会において

は、通婚圏を考えることは、即ち農民の生活圏を考えることに繋がる重要なテーマであると考えている。今回は、結婚の様相に焦点を絞り分析を試みた一考察である。

第一章 結婚の研究の現状と課題

近世日本の地域別の結婚パターンについて、渡邊吉利氏は、集落単位の宗門人別改め帳に基づく結婚年齢のデータを拾い出し分析している。その結果、西日本では女子の結婚年齢が高く、東北日本では、非常に早婚なパターンが観察され、その間に位置する中部・東海地方はそれら双方の結婚パターンの境界領域になっていると述べている。(註1)

鬼頭宏氏は中央日本の農村では、「十八・十九世紀における長期的な平均初婚年齢は、男二十五〜二十八歳、女十八〜二十四歳の間にあつた」とし、「女性の初婚年齢について十八世紀・十九世紀の各地の農村を比較した結果、西日本の研究が遅れているので確実なことはいえないが、江戸時代後半の結婚年齢は「西高東低」の傾向があつたようである」と述べ、さらに「少なくとも、東北と関東は早婚傾向が強く、反対に中部日本の濃尾地方周辺ではそれより三年から五年は晩婚であつたことは確かである」としている。(註2)

小林計一郎氏は信州小県郡塩尻村下塩尻部落の宗門帳について女子の結婚を調べた。その中で、江戸中期から後期にわ

たるとびとびの二十五年間の年代別結婚件数や結婚年齢を調べ、結婚年齢の平均が二十二・七歳になっていると導き出した。さらには離婚と通婚地域についてまでも分析し、通婚範囲が、小県郡内か、隣接する更埴二郡にはほとんど限られていると調査した。(註3)

森安彦氏は幕末維新期の武州荏原郡太子堂村五十五件を中心に自身の太子堂村名主森家文書を用いて、妻と夫の平均寿命、結婚年齢、出産期間、婚姻圏、離婚と再婚について些細に調査している。この中で、初婚の平均年齢については、女性で二十二・四歳、男性で二十七・九歳となっていた。婚姻圏については、文化十二(一八一五)年から明治六(一八七三)年までの約六十年間に婚姻が百十件あり、いずれも日帰りでできるかどうか婚姻の一つの条件であったと分析している。(註4)

法政史研究から結婚について論じている人として、牧健二氏が挙げられる。牧氏は、「婚姻は縁組と婚姻との二つの形式によって成立した」とし、「縁組は結納を取り交わして婚姻を契約することを言い、両当事者の家の戸主の契約として行われるのを例とした。武士では主君の許可を得なければならなかったが、平民では之を要しない。縁組の後には夫婦に準じたる貞操上及び忌服上の関係が生じた。だがこれは解約しうる。一方、正式の婚姻は結婚の式を以て行われる。いわゆる三三九度などの式が行われる。武士では之を主君に届け

出ずるを要する。平民では必ず仲人をたてて婚姻をなす事を要した。(註5)」と縁組と婚姻とはかなりの差違があることを示している。

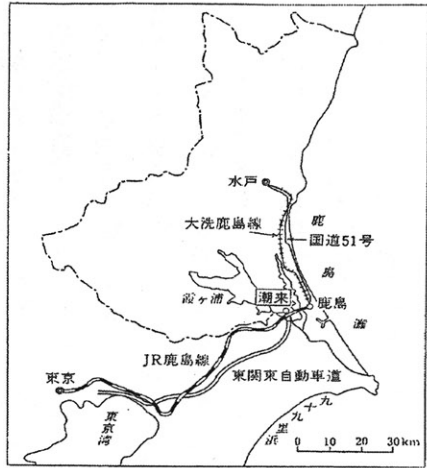
森下みさ子氏は、民俗学の視点から結婚を研究し、村落における通婚の範囲は、江戸末期においても三里半径におさまり、祭りを見に来られる程度とし、これが民俗学で言うところの遠方婚であると述べている。(註6)

江戸時代の結婚は現代とは異なり、個人同士の結びつきよりも家同士の結びつきが強かったことは言うまでもない。では、どのような手続きを経て、嫁や婿は来るのであろうか。何歳ぐらいで結婚したのであろうか。まだまだ史料を発掘、分析して具体像を各地域ごとに明らかにしなければならない。そのため、地方史研究の推進が急務であると感じている。

第二章 大洲村結婚の様相

第一節 大洲村概観

ここ大洲地区を含む水郷潮来地方は、首都東京から百キロ圏内にあり交通面ではJR鹿島線が通り、また東関東自動車道が通じている。このため東京との交流は極めて盛んとなり、経済文化、観光の面でも強い影響を受けている。しかし、この交流は決して今に始まったわけではなく、平安末期から利根川下流域を中心とする広大な水域に水上交通が発達し



ていった。

地図を見てわかるように、北は北浦、西は霞ヶ浦、東は鹿島灘で、さらに銚子へと繋がる利根川があり、周りが川に囲まれている。近世の潮来河岸も、中世の霞ヶ浦水運で栄えた津に発している。

そして、天正十八年（一五九〇）に徳川氏が入部し、更に慶長五年（一六〇〇）に幕府を開くに及んで、江戸を中心とした河川水運網やそれと結びつく沿岸海運が整備されていったのである。徳川幕府による利根川の東遷事業によって、江戸と結ぶ内陸水路が確立し、常陸の国の年貢米や様々な物資が、川船で江戸まで回漕されるようになった。

仙台藩をはじめとする東北諸藩が、近世初期から江戸廻米などに「内川廻し」と呼ばれるルートを採用したことから、このルート上にある水郷潮来地方も繁栄したのである。このような水上交通を利用して、俳人松尾芭蕉をはじめ多くの文人墨客が水郷地方を遊歴している。また、近世中期以降は、鹿島神宮や息栖神社などを参詣する東国三社詣での遊覧客で

新たな繁栄を迎えた。水郷遊覧が盛んに行われるようになると、潮来は歓楽地として栄え、中でも潮来遊里と僅謡「潮来節」は有名になっていったのである。

大洲村は中世末の土豪が帰農する過程で、権威と資力を利出し開発を推進した、いわゆる土豪開発新田地域である。大洲新田についての説明は、「日本歴史地名体系⁸」に的確になされているので部分引用しながらまとめてみる。（註7）

郡の東南端に位置し、西は辻村、東は徳島新田。南・北を浪逆浦に囲まれた新田村。開発者村田氏の子孫がまとめた村田家大系図によると、村田有通氏は天正十八年（一五九〇）小田原北条氏に味方した千葉氏とともに没落し、有通の二子彦五郎が従者とともに大洲に移住して、開拓に着手したという。初期の開発状況を示す資料を欠くが、前記系図に「文祿・慶長ノ頃近郷ヨリ入百姓有之、家数七軒トナル、依テ七軒島ト唱ヘル」とあり、現在まで七軒島の呼称は伝えられている。寛永十八（一八四一）の板久郷大須新田御検地水帳には、田畠・屋敷合わせて二十三町三畝十七歩、名請人六十四人、うち屋敷持ち二十九人の記載がある。正保二年（一六四五）板久（潮来）村庄屋支配から独立し、初めて大洲庄屋役が置かれ、同時に年貢の割付も板久村から独立した。このことは、一つの村として実質的に独立したことを意味している。

庄屋には開発者の子孫が世襲で選ばれ、以後文政四年に庄屋支配をめぐる村方騒動で庄屋が退役するまで続いた。年貢

割付状からみた村高は、正保二年二〇一石、宝永五年二二一石、天明四年三六七石、文化四年四一四石で水戸藩の天保全額検地後の天保一四年には六七三石と激増している。同年大洲村と改称した。大洲新田にとつては、新田として「保護の対象とされた村」から、「一人前の村」となったことを意味している。

第二節 大洲村人別帳

寛永十五（一六三八）年から明治五（一八七二）年にかけて全国で作成された宗門改め帳は、近代以前の社会に生きた人々の生活を知る、この上ない史料である。この史料の本来の成立上の目的は、寛永十五年という年が、「鎖国令」の発令された前年、すなわち徳川幕府がキリスト教厳禁の政策に踏み切った直前であったことから推論できるように、宗教上の信仰調査であったことは明瞭である。しかし、ここ大洲村では、宗門改め帳は未だ目にしていない。代わりに、近世の農民の家族や人口を知る基礎となる史料は、「人別改帳」といわれるものである。人別改めが全国的に行われるようになったのは、寛文十一（一六七二）年の幕令に基づくが、水戸藩では、それ以前の寛永十五年ごろから、年貢夫役を確保することを目的として、全領村にわたって「人馬改」が行われていた。これは、毎年行われていたとは限らないが、享保の改革の一環として八代將軍吉宗が享保六年からは、幕府へ

六年ごとに、各藩共領内人口を報告しなければならなくなったこともあり、励行されるようになった。ここに至り、現代における「戸籍簿」あるいは「住民基本台帳」に近い性格を持つようになったと考えることができるが、更に「印鑑登録台帳」の役割も兼ねている。

では、「人別帳」にはどのようなことが記載されているのだろうか。分析対象とした大洲村の文化七年の「人別帳」一部を次に示す。

高 八石四斗貳合

一 百姓 仁衛門印 とし二十四才

女房 なよ 同 十七才

母 よの 同 四十六才

祖母 とみ 同 六十六才

妹 とみ 同 十九才

倅 豊七 当才

次男 松之助 申正月出生

三男 亥之助 亥四月中出生

男式人

六人内

女四人

この村の「人別帳」の特徴は数年ごとに帳面を作成し、これにその都度書き足してゆくという形式をとっていることである。右に示した例を見ると、八人の人物が書かれていて

も、合計人数は六人になっている。ここでいう六人は、百姓仁衛門から倅豊七までの合計であり、この人数は文化七年（一八一〇）午年に把握されたことを示している。以後、出生や結婚、離婚、死亡等の人口変化があるたびに追加・訂正を行っている。そして、二回目の役所の調査が六年後の文化十三年（一八一六）子年であった。これは、先ほど述べた徳川吉宗による六年ごとの調査（子午改め）と一致する。

また、この事情は御奉行所へ差し出されたことが記録と残されている末尾の文から窺い知ることができる。

右村方人別帳の儀者文化之子年仕立候分ニ御座候所年々張紙にて出入相直し最早難用相なり候ニ付仕替之儀被為仰附候間悉く相改少茂無相違様仕立此度御続合し受け候所万一取繕候儀茂在之及露頭候ハバ当人ハ勿論村役人之家々共何方曲事ニ茂可被仰附候以上

右新田

文化七年午七月

庄屋市左工門

印

与頭平五郎

印

同 藤衛門

印

御郡御奉行所様

右続合以并用見届相違無之候以上

奥有六左衛門

印

したがって、年齢は書き加えられた時点のままであるが、

一つ一つの家族構成がどのように変化していくのかを見るのには便利である。

第三節 人別送り状と人別受取状

今回、人別帳とは別に未解読の史料を発見するに至った。それがこの人別送り状と人別受取状である。縁談については人別送り状と受取状とを、村役人同士が交換して手続きは完了するわけであるが、その他離婚や引越など戸籍が移動する場合にやり取りがなされた。ここ大洲村に関する史料も散逸しながらも享保八（一七二二）年から安政五（一八五八）年まで一枚文書八十七枚が保存されており、これらの史料から、文化七年から文化十三年までの人別帳記載を追認するだけでなく、結婚と離婚の実証研究の一助になると思われる。一枚文書八十七枚の内訳は、人別送り状（他村から大洲村へ）が五十件、人別受取状（大洲村から他村へ）が三十七件である。人別送り状の中から一例を挙げると次のようである。

人別送之事

下総国香取領篠原村

百姓 藤衛門

娘 てい

右之者其御村方百姓〇〇門姫ニ縁付ニ候間

人別送り遣し村方人別相除キ申候ニ付

年廿一才

御村方人別ニ御組入可被成候仍而如件

安政五年午六月

右村

名主 利衛門 印

常弼行方郡大洲村

御庄屋

村田市左衛門殿

となつており、人別送り状は出身地、名前、年齢、本文、日付、名主名、宛先（婚姻先）、の順に記載されており、戸籍に加えるようお願いした旨が記載されている。一方、受取状は次のようである。

人別請取之事

延方村曲松組

百姓 ○八

婿 惣太

年 廿式才

右之者其御村方百姓○○衛門二男縁付来り

送り被遣候ニ付当御改より村方人別江組入

候間御村方人別御除可被成候依而請取如件

右村

長

柳原熊助

弘化三年午六月

大洲村

庄屋

喜衛門 殿

この史料から分かるように、嫁ぎ先、名前、年齢、本文（出身地含む）、日付、受入れ側名主名、出身地側庄屋の順に記載され、人別に加えることを了承した旨が記載されている。この二つの文書いずれからも多様な情報を得ることができ、この二つに分かるだろう。文書によっては記載内容に多少差があり、必ずしもこのような情報を得られるわけではない。特に年齢については書かれていないものも一部ある。

また、人別送り状のうち、人別帳に記載されている出入り分とを照らし合わせると同一内容のものが四件あり、確かに文化年間に人別送り状・人別請取状にてやり取りがなされていたことが確認できた。

第四節 大洲村における結婚

大洲村方人別帳を基に、文化七（一八一〇）年午より文化十三（一八一六）年子までの出入りの様子をまとめてみると次のようなことが判明した。文化七年七月の総人数は三百二十六人（男百七十四人、女百五十二人）家数六十二軒である。家族の規模は平均すると、五・二六人である。この七年間に村内では再婚や養子縁組も含めて二十八例の結婚があつ

たことが読み取れる。まず、大洲内での「姫」の行き来は二例、「婿」が一例である。「姫」として大洲村から他村へ嫁いだ例が二例。「姫」として他村から大洲村へ嫁いだ例が十五例である。また、「婿」として大洲村から他村へ嫁付いた例が二例。「婿」として他村より大洲村へ嫁付いた例が六例である。この七年間では年間平均四件である。

さらに、人別送り状と人別受取状を見ると、「姫」として大洲村から他村へ嫁いだ例が二十件、「姫」として他村から嫁いだ例が三十四件。また、「婿」として大洲村から他村へ嫁付いた例が十二件、「婿」として他村から大洲村へ嫁付いた例が八件である。

これらを合計すると、結婚件数は女性で七十三件、男性で二十九件である。(ただし、文化七年から文化十三年に限っては、一枚文書と重複している例があるので、その分については一枚文書の方の合計から差し引いている。)

ここから、年齢がわかっている者を対象として結婚平均年齢(再婚含む)を割り出すと、「姫」が二十二・二六才。「婿」が二十六歳である。女性の内で最も年齢の低いもので十五歳で、調査期間においては三例窺えた。最も高い年齢では三十五歳が一例窺えた。男性では最も年齢の低いものは十九歳が一例、最も高い年齢は三十九歳が一例存在した。

この結婚平均年齢は果たして高いのか、低いのか、宗門人別帳を基に一地域の研究を行った、森安彦氏の太子堂村と比

較してみると、太子堂村では初婚の結婚平均年齢しか求められてないが、女性が二十二・四歳であり、男性で二十七・九歳であった。最も低い年齢では一女性で十五歳、最も高い年齢では三十八歳であった。男性においては、最も低い年齢では十四歳、最も高い年齢は四十二歳であった。太子堂村では初婚の年齢ではあるが、男女の結婚平均年齢の差は五歳ほどであり、大洲村においてはおよそ四歳と差がないことがわかる。(註8)

また、大洲村と同じ条件で、再婚を含む結婚年齢を求めている小林計一郎氏の研究とも比較すると、塩尻村下塩尻部落は二二・七歳なのではぼ同じである。(註9)

ちなみに、他の地区の結婚平均年齢の事例を見てみると、山城国相楽郡西法花野村を研究対象地域とした山下研究会は寛文六(一六六六)かち享保二(一七一七)年の期間で男で三十四・七歳、女で二十五・六歳。美濃国本巢郡神海村を研究地域とした速水融は延宝二(一六七四)年〜元禄元(一六八八)年で男三十三・九歳、女二十四・七歳、宝暦元(一七五一)年〜天明八(一七八八)年で男三十三・三歳、女二十五・一歳と求めた。尾張国海西郡神戸神田を研究地域とした関山直太郎は安永七(一七七八)年〜文化四(一八〇七)年の期間で男二九・四、女二十一・七歳と求めた。(註10)

この結婚年齢と比較すると、大洲村が早婚だったことがわかる。また、東北・関東は早婚、関西は晩婚だったことにつ

いては渡辺吉利、鬼頭宏両氏が述べて、既知のこととなつて
いるが、この大洲村でも同じ様相であつたと言える。

同村結婚では人別送り状・受取状は行われないので、割合
はわからない。そこで、正確な出入りの様子がわかる大洲村
人別帳のみでの同村結婚を見ると、その割合は二十八件中三
件で約十一%になる。森安彦氏の太子堂村では村内婚は二
十%で、それでも非常に少ないと分析している（註11）の
で、この数値は極めて低いといえるだろう。

さらに、再婚について速水融氏はある年齢以上になると著
しく困難であつたといえるとしていて、再婚年齢について、
男性は割と意識的制限がないのに対し、女性は三十五歳まで
が再婚できる年齢だとしている。（註12）そして大洲村の場
合も当てはまると言えよう。

しかし、小林計一郎の調査では、四十八歳以上で結婚した
女性も三人おり、地域差が見られるのではないのかと考えら
れる。また、特筆しておきたいことがある、それは人別送り
状の中に恋愛結婚とおぼしき文書が一例あつたことだ。次に
例を示す。

人別送り之事

爪木村

一 百姓 ○兵衛

娘 たみ

年廿才

右者其御村方百姓○○右衛門方江
被致懇届相遺し候所熟縁相成

候ニ付此方人別相除候間其御村方

人別御加入可被成候依而如件

安政五年午六月

爪木村

名主 君和田小左衛門 印

水戸御領

大洲村

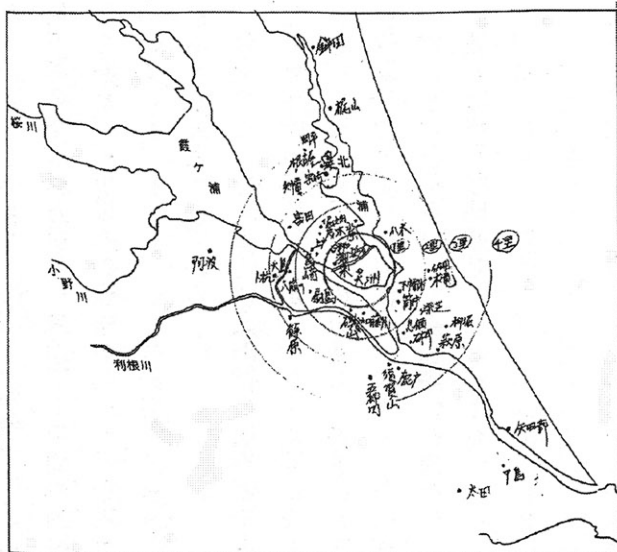
御庄屋 村田市左衛門殿

右の文からわかるように、「懇」と言う文字が見えるが、こ
れはこの文書でしか見られない。

また、「熟縁」という文字もなかなか意味深長である。
これが、恋愛結婚といつてよいのかどうかはわからないが、
個人の意志が尊重された例のようにも感じられる。ある程度
形式化された書き方の中で、このような表現方法の本文は八
十七枚の中でも異例である。江戸時代は家を存続させること
が第一で、そのための結婚であるが、中には恋愛結婚で結ば
れる夫婦もいたはずであり、そう考えると、この例だけにな
く、実際には恋愛結婚をした人も少ない割合かもしれないと
考える。その点で、この人別送り状は可能性を持った文書で
あり、今後の結婚研究の課題であるともいえる。以上のこと
から、大洲村の結婚は早婚で、村外婚が多いということが調
査できた。

第五節 通婚圏

次に結婚相手の出身地と縁付き先を分析し、「通婚圏」について考察する。上の図は、人別帳と人別送り状・受取状を基に、どの村から大洲村へ嫁入り・婿入りしたか、反対に、大洲村からどの村へ行ったかを地図に表したものである。また、表は、一里ごとに割合を示したものである。



村内	一里内		二里内		三里内		四里内		遠方	
	一枚 文書	人別帳	一枚 文書	人別帳	一枚 文書	人別帳	一枚 文書	人別帳	一枚 文書	人別帳
5	43	12	22	6	10	4	8	2	4	2
4%										
51%		24%		12%		8%		5%		

件数別に見ると、最も多い交流先は隣村の延方村で三十一件、次いで同じく隣村の潮来村で十一件、次いで、水原村が十件となり、以下辻村、上戸村で四件、大嶋村で三件、深芝村、息栖村、萩原村、富田村、爪木村、嶋崎村、篠原村、堀之内村、扇島村がそれぞれ二件で、その他は一件ずつ、というような順になっている。

表からわかるように、村内を含む一里以内での通婚圏は全体のはば半分の五十一%であった。次が、一里から二里以内の二十四%であり全体の約四分の一を占めている。以下、二里から三里以内が十二%、三里から四里以内が八%、四里以上は五%で六例見つかった。

森安彦氏は、太子堂村の分析を通して、通婚圏の一つの条件として、日帰りが出来るかどうかと言う条件を提唱している。妻の実家に行つて帰つてこられる、その範囲というのが大事であり、当時は徒歩による移動であることから、二里半(十km足らず)以内での婚姻圏が中心になり、余り遠くの村とは結婚していないという分析を行っている。(註13)

一方、速水融氏は、西条村の通婚圏を分析し、次のように結論づけている。結婚の地理的範囲は生活範囲そのものであると規定し、六km以内つまり歩いて二時間程度に集中していると述べている。(註14)

一方、森下みさ子氏は、瀬川清子『婚姻覚書』を例に取り、村落における通婚の範囲を三里半径(十二km)以内と捉

え、祭りを見に来られる程度「馬の足と人の足でことたる遠さ」と述べている。(註15)この瀬川清子氏の調査は、東京都下南多摩郡恩方村江戸末期五十年間の通婚範囲を調べた結果であり、三里以内の通婚が九十七%を占めていたことに基づいている。しかし、これは民俗学で言うところの遠方婚であるとも捉えられている。

以上のことをふまえて大洲村の通婚圏を再度考察すると、この地域では通婚範囲がかなり広範囲に及んでいることがわかる。大洲から見て北の方角の一番遠いところへ嫁いだ人は直線距離で七里、反対に、一番南の方角に嫁いだ人では七里半であり、三里を越えての通婚が結構存在したことから、他域とは特異な地域だったと言える。

では、なぜ・広範囲の通婚が展開されたのであろうか。それは、既に第一章の大洲村概観で述べたが、大洲を含めた水郷潮来地域一帯は近世は東北からの米や物品を江戸に運ぶ中継地として栄え、水の郷として賑わっていたことに大いに関係がある。現在でも仙台河岸津軽河岸といった地名が残っており、一年中を通してサツパ船による観光遊覧が行われている。ゆえにこの地域の人々にとっては川が生活の要であり、移動するにも船が絶対的に必要であった。また大洲新田は周りが川で囲まれているので、他村からは船で来ることでしか方法はなかった。この状況は川が道路として埋め立てられる昭和四十年頃まで続いたのである。「潮来花嫁さん」は近代

に作られた歌謡曲であるが、若くして舟で嫁いだことを表現した歌詞である。これはあくまでも歌謡曲だが、江戸時代後期の潮来もこれとはほぼ同じ状況であった。ここからも、当時の様子が垣間見られるだろう。村から村へ舟を使って移動するということは、言い換えれば、川が存在して船で交流しやすい地域であれば、距離に関係なく、通婚しやすい地理的環境であったといえる。

遠距離の太田村も中島村も利根川本流へ注ぐ支流が通っていた。その際は領主形態は関係なく、そのため下総国からも多くの人々と婚姻の行き来をしている。地図を見れば、川を船で行き来して婚礼が行われたことは一目瞭然であろう。徒歩なら二時間かかる道のりも船ならもつと短時間で往来が可能になる。故にその分距離が伸びるのである。大洲村の通婚圏は先行研究での通婚圏とは異なり、この通婚圏こそが大洲村の特徴ともいえるだろう。

また、速水氏は婚姻の地理的範囲はイコール生活範囲としているが、だとすると、大洲村は通婚圏だけが広いのではなく、そもその生活圏自体も広いと考えられる。川があるから通婚圏が広がるなら、川がそばにある地域は大洲村と同じ結果が得られるのではないだろうか。川に近い他地域の通婚圏との比較も興味深いので、今度の課題としたい。

おわりに

今回、人別帳と人別送り・受取状から地元である茨城県潮来市大洲地区の結婚の様相を考察するに当たり、先行研究との事例とを比較しつつ、具体的に数値化し、実証的な研究を試みた。しかし、反省すべき点は多々ある。まず、今回の史料として、大洲村の人別帳・人別送り状・受取状を用いたが、人別帳は文化七年から十三年までの七年間分しかなく、短い期間での考察になってしまったことである。近隣地域の長期的な人別帳を用いての比較、考察も行えたらよかつたと思うが、如何せん長いスパンでの史料が今も現存していることは難しく、若しくは未だ発見されていないからということもある。そのため、人口動態や人々の一生の様子を追うことが出来なかつたのは残念である。だが、人別送り状・受取状八十七枚の発見とそれを使つての結婚の分析が出来たことは大きな成果だと感じている。

地方研究は手つかずの地域も多く、未だ研究が遅れているので、そのため地方研究はそれを研究対象とすることに意義がある。地方研究が進めばその分様々な地域のデータが得られ、統計が取れ、また各地域の特色や今までの研究の穴を埋める役割を担うということもあり、重要な情報を抱えている。よつて、地方に眠る情報という古文書を発掘し、それら进行分析・解明することが今後も必要であると考える。今回大

洲地区を対象としたこと、結婚という研究分野に一地方の様相を報告したのであるが、地方研究史に少なからず参考にしていただけたら幸いである。

また、農民の生活を考える上で重要な基盤をなす結婚を見てきたわけであるが、限られた史料からではあつたが、確実にこの地域に息づいていた人々の生活を確認することが出来た。とりわけ、水郷という自然環境ならではの通婚圏・生活圏を確認できたことは、他の地域と特異したことであり、大きな成果である。

結婚が家系を維持したことは間違いないことで、それはこの地域は米作りの単作地域で、家族は重要な労働力であり、家を存続させることも言うに及ばないことだと思ふ。今回、恋愛結婚とおぼしき人別送り状の例を挙げたが、やはり結婚自体は家と家の結びつきによるものだと感じずには居られなかつた。それは恋愛結婚なるものが少ないと思ふからである。人別帳・人別送り状・受取状は形式的なものなので具体的な内部事情が書かれてはいるわけではなく、実際のところがどうなつていたのかは不明な点が多い。しかし、通婚圏を見る限り、四里以上の地域から結婚している例があり、お互いに遠い彼らは、おそらく恋愛結婚ではないと思ふのが自然であるからだ。江戸時代の結婚に及ぶまでの過程や伴侶をどのようにして選ぶのかなど、私は新たな疑問が出てきた。

また、今後の課題として、結婚までの準備や結婚前日まで

の準備、当日の式の様子や祝宴の様子、さらには結婚後の生活のようすが詳細に把握できれば、江戸時代の庶民の結婚という分析に新たな深まりが見られると思う。今後、史料の発掘に期待したいところだ。

離婚の様相については、もう少し検討の機会をいただき、後日提案したいと考えている次第である

注釈

- (1) 渡邊吉利「近世以降の日本における地域別の結婚パターン」(『厚生指標』第四〇巻第一〇号、一九九三年)一四項〜一五項
- (2) 鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』(講談社、二〇〇〇年)一二二項〜一二三項
- (3) 小林計一郎「江戸時代における一農村の結婚—宗門帳を通して見た小県郡塩尻村下塩尻部落の女子の結婚についての諸調査」(『信濃第三次』三巻八号、一九五一年)五二六項〜五二八項
- (4) 森安彦『古文書が語る近世村人の一生』(平凡社、一九九四年)八八項〜九〇項
- (5) 牧健二『日本法制史』(国史講座刊行会、一九三三年)三五七項
- (6) 森下みさ子『江戸の花嫁』(中央公論社、一九九二年)八項〜九項
- (7) 『茨城県の地名 日本歴史地名大系8』(平凡社、一

九八二年)四三二項以下

- (8) 前注(4)に同じ
- (9) 前注(3)に同じ
- (10) 日本女性史研究会『日本女性史第3巻近世』(東京大学出版会、一九八二年)四七項
- (11) 前注(4)に同じ
- (12) 前注(2)『江戸の農民生活史 宗門改帳にみる濃尾の一農村』一四六項
- (13) 前注(4)に同じ
- (14) 前注(2)『江戸の農民生活史 宗門改帳にみる濃尾の一農村』一二九項
- (15) 前注(6)『江戸の花嫁』九項

【参考文献】

- ・潮来町史編さん委員会『潮来町史』一九九六年、潮来町役場
- ・渡邊吉利「近世以降の日本における地域別の結婚パターン」(『厚生指標』第四〇巻第一〇号)一九三三年
- ・鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』二〇〇〇年、講談社
- ・小林計一郎「江戸時代における一農村の結婚—宗門帳を通して見た小県郡塩尻村下塩尻部落の女子の結婚についての諸調査」(『信濃第三次』三巻八号)一九五一年
- ・森安彦『古文書が語る近世村人の一生』一九九四年、平凡社
- ・森安彦『古文書を読もう』二〇〇三年、講談社

- ・牧健二『日本法制史』一九三三年、国史講座刊行会
- ・森下みさ子『江戸の花嫁』一九九二年、中央公論社
- ・高木侃『三くだり半と縁切寺』一九九二年、株式会社講談社
- ・日本女性史研究会『日本女性史第3巻近世』一九八二年、東京大学出版会
- ・高木侃「妻方からの離縁状―庶民離婚の法上の意義―」
〔『専修法学論集』八七号〕二〇〇三
- ・鎌田浩「江戸時代離婚法の再検討―いわゆる夫専権離婚制
への疑問―」〔『牧健二博士米寿記念日本法制史論集』一
九八〇年、思文閣
- ・児玉幸多「身分と家族」(『岩波講座日本歴史近世2』一
九七一年)
- ・『茨城県の地名 日本歴史地名大系8』(平凡社、一九八
二年)
- ・いばらき女性史編さん事業委員会『いばらき女性のあゆ
み』一九九五年、茨城県

潮来と潮来ぶしの広がり

小沼 正司

潮来の位置

潮来は利根川水郷の中心地にできた歓楽郷として、江戸時代から明治ごろまで栄えた。しかしなぜこのような水郷湿地帯が出来たのかというと、その原因は利根川の水路を変更したからと言える。昔の利根川は東京湾にそそいでいたので、いったん洪水でも出ると、江戸が被害を受けるからである。徳川家康は、江戸を洪水禍から守ると同時に、利根の水を利用して関東の中心を開拓し、また東北の伊達藩に備える軍事上の理由もあって、本流を東につけかえて銚子港へもっていったのである。この治水工事はたいへんな難事業で、家康の家来で伊奈備前守忠次という人が、息子、孫、の三代、六十五年かかったと言われている。江戸は水害を受けることは減ったが、新しい水域で吐き出す土砂は、急速に沖積作用をして、水面すれすれにあるような島をいくつも造り出した。それがやがて十六島となったのである。水郷の中心地にある関係上、潮来は上り下りの船がはげしく集まるばかりでなく、歓楽郷として発展した。

潮来交通

潮来は利根川口近くの要所で、江戸時代、奥州から江戸行きの旅人は、銚子港から利根川にはいり、潮来に寄ってからさらに利根川をさかのぼり、印旛沼近くの「木下」^{きおろし}で下船、陸路を「行徳」まで行き、「行徳」でふたたび船に乗って江戸に入った。

水戸家は、江戸と水戸の往復がはげしかったが、陸路の「水戸街道」のほか、小石川（後楽園）の江戸屋敷門前から船で水道橋を通り、江戸川ぞいに隅田川を過ぎ、「行徳」から陸路を「木下」に出て、そこから利根川を下り「潮来」に着く。潮来から霞ヶ浦を進み「小川」へ、小川から「海老沢」へ出て涸沼を渡り、那珂湊に出て、水戸城へはいるのが順路だったという。利根川をのぼって、「関宿」から江戸川を「松戸」へ、そして江戸という順路もあった。いわば、潮来は水戸家の玄関口ともいえる。

潮来は、だから奥羽をはじめ諸藩の親船が停泊し、奥羽諸藩の蔵屋敷（各領地から回送の米穀などを貯蔵した食庫、今でも河岸跡として碑が建てられており確認できる）など立ち並んで港町のようににぎわった。光圀公はここを重視していたが、ここに遊女屋ができたのも、光圀公の配慮によるものといわれ、当時は江戸吉原にまねた大門（近年復元された）があり、数百人の遊女がいたという。

江戸時代には、神社参りをするという口実をもうけて旅に
でかけ、その帰りには遊里へ立ち寄るような風習があった。
お伊勢参り、熊野参り、弥彦参りなどその最たるものであつ
た。利根川の周辺でいうと、香取、息栖から鹿島への三社参
りをして、その帰りには潮来で遊んだのである。

光圀公、潮来を宣伝する？

潮来は、水戸光圀がひらいたといつてもいいほど、光圀と
関係の深い所と言える、歎楽郷として全盛期を迎えた潮来を
代表する唄には「潮来出島の真菰の中に あやめ咲くとはし
おらしや」ができた。この文句はだれが作ったのかはつきり
しないのだが、あんまりはやつたので、こんな話がつたえら
れている。この文句は水戸黄門光圀の作であつて、水戸の下
市にあつた遊郭を、藩の子弟を教育する上でじやまになるの
で、その遊郭を潮来へ移転することにした。人情のあつた光
圀公は宣伝を兼ねこの唄を作り、自筆で書き、江戸の扇子屋
へ十万本注文した。そして代金を前払い（或るいは手付け金
だけ）をして、現品を受け取らず、その処分にこまつた扇子
屋は、ただ同様の安値で捨て売りのために、潮来の名前は
全国的にひろまつたというのだが、この唄の文句がいかに全
国的に有名だったかがわかるのである。

潮来音頭

潮来の名まえがはじめて民謡にできたのは三百年ほど前
の寛文年間に出た「山家鳥虫歌」で、その常陸の部には盆踊
り唄として「潮来出島のすな真菰 殿に刈らせて我ささぐ
さっさおせおせ」そのほか二首が記されている。ところが、
それから五十年ほどあとの宝永年間に出た「浮れ草」では、
「潮来節小唄」として三首あげてある。さいしよの「潮来
節」が「さっさおせおせ」という掛け声であつたのがすた
り、「しよんがえ」と変わったが、舟唄とかの船頭唄調が、
お座敷調の唄に変わり定着したことになる。

この唄が、全国をめぐるっているうちに尾張の「熱田」で
「よしこの節」というのに変わった。これを「どどいつ」と
いうものにくふうして江戸の神楽坂の寄席から、江戸中に流
行させたのが都々逸坊扇歌で、この人が都々逸の始祖となつ
た。この人は現、常陸太田市（碑が建てられている）の、磯
部たんぼの医者の子、美声と音曲好きから少年のころ家を
出て江戸で修行、扇歌の芸名で文才をたよりに高座で作つて
うたう「問答どどいつ」というのを始めた。「なぞかけどど
いつ」ともいう。客がなぞをかけると扇歌は三味線を弾きな
がら「どどいつ」で答える。これが当たった。「どどいつ」
は、江戸のものと思われているが、本家は潮来の「潮来節」
である。この「どどいつ」は調子において現代日本歌謡の原

点的な役割を果たし、その功績は大きい。どどいつの兄弟分「よしこの節」は阿波踊りの「阿波よしこの」となつて、徳島に残つていて盛んである。

潮来の遊里が栄えるにつれて、「潮来節」もしくは「潮来小唄」の類がさかんに作られた。そして江戸時代の末期になると「潮来節」は潮来だけにかぎられた唄でなく、京阪地方でも「潮来節」という名の小唄がひろまったと当時の文献にある。

潮来音頭

揃うた揃うたよ

踊り子が揃うた（アリヤサ）

秋の出穂より よく揃うたシヨンガイ

よく揃うた 秋の出穂より

よく揃うたシヨンガイ

潮来出島の 真菰の中に（アリヤサ）

菖蒲咲くとは しおらしやシヨンガイ

しおらしや 菖蒲咲くとは

しおらしやシヨンガイ

ここは加藤洲

十二の橋よ（アリヤサ）

行こか帰るか 思案橋シヨンガイ

思案橋 行こか帰るか

思案橋シヨンガイ

さらばこれより

上歌謡をやめて（アリヤサ）

次の甚句に移りましょうシヨンガイ

（移りましょう 次の甚句に

移りましょうシヨンガイ）

潮来甚句

「潮来音頭」につづいて「潮来甚句」を演じ、それに踊りを配することによつて「あやめ踊り」という。「潮来音頭」では、かならず「そろたそろたよ 踊子がそろた 秋の出穂よりよく揃うた」とうたうが、甚句では「そろたそろたよ 足拍子手拍子 秋の出穂よりよくそろた」とうたいわけするのが習慣になつている。

「あやめ踊り」では、音頭のことを上歌謡というのがならわしであつた。

最後に「さらばこれより甚句をやめてつぎの大漁にうつり
ましよう」とうたうが、これは当時の「あやめ踊」で、おま
けの余興として銚子の「大漁節」を演じるのが習慣だったか
らといわれている。

潮来甚句

揃うた揃うたよ 足拍子手拍子

(アラ ヨイヨイサ)

秋の出穂より ヤレ よく揃た

潮来通いの船なれば

津の宮前から帆を下げて

潮来の河岸へと乗り込め乗り込め

潮来出島の ざんざら真菰

(アラ ヨイヨイサ)

誰が刈るやら アレ 薄くなる

香取鹿島に神あるならば

逢わせ給えよ いま一度

筑波風を 片帆にかけて

(アラ ヨイヨイサ)

潮来出島に ヤレ ひとほしり

恋に焦がれて鳴く蝉よりも

鳴かぬホタルは身を焦がす

さらばこれより甚句をやめて

(アラ ヨイヨイサ)

次の大漁節にヤレ 移りましょう

潮来節の歴史の項は「服部龍太郎・「時雨音羽」氏の記
述を参考にする。



続 潮来紀行文(Ⅱ)

小沼正司

近代の文人で、潮来へ来て紀行文を残した人として、先に「久保田万太郎」「若山牧水」そして(Ⅰ)で「吉田絃二郎」「大町桂月」「徳富蘆花」「田山花袋」と紹介しましたが、今回最後として「北原白秋」(抜粋)、「水原秋桜子」(全文)を紹介したいと思います。

北原白秋

一八八五—一九四二(明治18—昭和17)



詩人、歌人、童話も多数発表

代表作 詩集「邪宗門」「思い出」

歌集「桐の花」

昭和16年 芸術院会員

潮来の入江

すな真菰、真菰が中に菖蒲さく潮来の入江、はるばると我が求め来れば、そのかみ潮来の出島荒れ果てて今は冬なる。

旅やどり、消ゆるばかりに、一夜寝て寝ざめて見れば、霜しるし水の辺の柳、何一つ音もこそせね、薄墨の空の霧らひにただ白く枝垂れ深めり。枝垂れつつ水にとどけり。また白き葦にとどけり。そのかげの小さき苦舟、いよいよ霜の凍りて、こまごまと霜の凍りて、舟縁も苦も真白く、櫓も梶も絶えて真白し。つくづくと眺めてあれば、閑かなる入江のさまや、苦舟にのぼる煙も風無ければ直ぐに一すぢほそぼそとしばしのぼれり。広重のその絵の煙、目に見れば浮世なりけり。あなあはれ水の辺の柳、あなあはれかかりの小舟、寂しとも寂しとも見れ。折からや苦をはね出て、舟縁の霜にそびえて、この朝の紅き鶏冠の雄の鶏が、早やかうかうと啼き出けるかも。

歌集「雀の卵」大正十年

潮来の黎明

一番鶏、二番鶏、三番鶏、四番鶏…それから潮来はほのぼのと夜明の景色になる、潮来は随分鶏の多い処だ。「中略」

今朝は全く頭が透きとほつてゐる。一本道を角菱の前まで行って突き当たって右へ折れると、やはり小堀つづきになってゐる。此処の景色はまた格別真白だ。小さい入江のほとりに一本のしだれ柳が霜をかぶつてゐる。その下に空船が一二艘、それも真白になつて、落ちついた墨絵の気持を出してゐる。

る。閑かな冬の閑かなこの心持。冬は全くここに結晶してゐる。芭蕉もたしかにこの寂を狙った。白秋の澄心も亦この一点を外には無い。

左手には白い土蔵がひとつ、その裏にはすがれた桑の木畑がある。その桑の木の小枝で雀が一生懸命に声をたてた。たつた一羽だがずるぶん思ひ切った高音を出したものだ。姿は見なかつたがこれが今朝きいた一番最初の雀の声だ。

ふいとある家の戸があいた。元氣のいい肥ったお内儀さん①が出て来た。新しい青い竹箒を持つてゐる。石屋の前では小僧が雑巾バケツに両手をつっこんでゐる。どしどしこれから石や敷居を拭きにかかるのだ。

又左へ曲がると、小路になつてゐる。生垣の柵や槇の葉のかをりがする。その生垣にくつついて乞食のやうな女が頭から青いものを被つて一心に溝凌ひをしてゐる。そのどぶの香がぶんぶんする。

下味噌と大きく書いた看板の下に直径四尺以上の大釜が据ゑてある。その薪屋の廂まで積み上げた薪の間から、雀がぼうつと三四羽飛び出した。勢のいい雀、羽ばたく雀の大きさ。これが今朝見た一番最初の雀の姿である。「中略」

小径のつき当りに大きな寺②の山門が見える、門内には高い松の古木が蒼蒼として見える。門を入ると、松風の音が澄みとほつて、そこに唐鷄が尻尾をふり切る程羽ばたきながら、枝から枝へ飛びうつつてゐる。その声の鋭さ。

愈々夜は明けはなれて、度ましい午前の気持になる。

本堂の格子から中をのぞくと、座禅とかいた札が内陣の欄干にかかつてゐる。奥の方はまだほの暗いが、一段高い仏前には白い紙の蓮華が、山程むらむらして、色も香もなく褪めてゐる。さうしてさびしい朝の日光はその一つ一つの花弁や円い葉の上に白っぽい細かな埃をまはしてゐる。

松風の音と座禅、私も泌泌した心に縁側に腰を下して澄み入った。「中略」

愈々古い潮来の水郷が夜から目ざめて来た。さうして裏の天王様の笹藪では一番おしまひの鶏が長く長く咽喉を曳いて、やがてけけつこつこつと啼き収めた。

「潮来の黎明」大正五年

水原秋桜子

一八九二—一九八一（明治25—昭和56）



俳人

代表作「葛飾」

代表句「啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々」

潮來十二橋

百合山羽公君が潮來を見物した歸りに私の所へ寄った。

「唐黍の影を横たふ舟路かな——なんていふ景色がほんとにあるかしらと思つてゐたら、まつたくありますね。」と言ふ。

「それより十二橋を通る時、紫陽花を見ませんでしたか。」と、きくと、

「さあ、ありますよ、あそこならあるにきまつてゐますよ。」と、本當に見たらしくはないが、頗るたのもしい返事である。私は羽公君といろいろ話をしながら、何年前はじめに潮來へ行つた眞夏の日のことを思ひ出してゐた。

まだ大學の教室に勤めてゐた頃、急に潮來へ行つて見たくなつて、土曜日の夕方佐原までゆき、船着きの宿の二階で蚊にせめられながら一夜を明して、翌る朝一番蒸気で潮來へ向つた。かなり大きな船で、水車が水を掻きながら進んでゆく

最舊式の仕掛である。眞菰の間をわけながら利根へ出て、對岸の閘門からいよいよ水郷にはひつた。かねて好個の材料とねらつてゐた水郷の景だから、私はたうてい船室などへ引籠つて居られず、船室の屋根になつてゐる甲板に登り、そこに莫菴を敷いて、物珍らしさうにあたりを見廻した。七月半ばのことだから、朝日は強く照りつけて、甲板はペンキの匂が鼻をつく。それをものともせず探美の眼をくぼつてゐるのである。

ある船着場へ來ると、舂が一人の客をのせて眞菰の中から漕ぎ出した。私は早速手帳をひらいて、

眞菰より漕ぎ出し舂朝ぐもり

と書きつけた。どうもこの朝曇は實景のままとは言ひ難かつたが、日が照つてゐた時より曇つてゐる方が、眞菰の色がずつと綺麗に見えるからさうしたのである。船路には鴉が澤山浮んでゐる。兩岸の菰の中では菰切が鳴く。その菰叢に一軒の家があつて、菰葺の屋根が大きく光つてゐる。私はその景色のまま黄昏れてゆくことを想像した。さうしたら菰切の聲が哀れさを増すやうな氣がして、

菰切や菰にしづみて暮るる家

といふ句が出来た。更に想像を押し進めて、私はそこを漕ぎゆく一艘の船を脳裡に描き出した。

葭切や人顔暮れてすぐる船

この句も割合簡単に出来た。私は船中で賣る煎餅を食ひ、溢茶をのみながら、またも行手の景に眼を凝らした。

牛堀といふ所まで来ると、霞ヶ浦が見える。今まで北を指していた航路はここで直角に東へ曲る。その曲り角が霞ヶ浦と通じてゐるのである。あたりにはポプラが立ち並び、夏霞のはてに筑波が見えて、實にいい景色である。近頃は潮來行の人がたいていこの航路を通らず、小さなモーターボートで佐原から利根を少し下り、香取津の宮の前あたりから、細い水路を通つて與田浦に入りそれから加藤洲の十二橋にかかつてゆくらしいが、歸りには是非蒸汽の航路を通つて牛堀の景を眺めた方がいい。ここでは乗客の出入りも相當あつて、小川から出て来た家鴨の群が舟の傍らに来て遊んでゐた。後年秋は、

古利根や家鴨とあそぶかいつむり

といふ句を得たが、これは此處の景色にヒントを得たものである。ただこのあたりの川は古利根といふのではなくて、横

利根といふのださうだ。

航路は潮來まで真直ぐである。藻刈舟が出てゐると、燕が澤山飛んでゐるのが句の材料になるばかり、あとは飽きるほどに蘆と眞菰がつづいてゐる。私もさすがに閉口したし、それに寝不足のため急に睡氣を催して、眼がさめたのは船が潮來の棧橋に着かうとするすぐまへであつた。

潮來の町は廢れた感じが強くて詠みにくいものと思つたので、私はすぐ對岸の加藤洲にわたつた。老婆が棹さす渡舟で茄子賣の女が同乗した。これも句になりさうであつたが、私は十二橋を早く見たいので、水に映る茄子賣の姿も、籠に満ちた紫の茄子も全く捨てて顧みなかつた。

十二橋といふのは、與田浦から來る航路が加藤洲をぬけて潮來に出ようとする四五町のあひだのほそい水に架けられた橋で、橋らしい形をしたものは二つか三つ、あとは板を渡したやうなささやかなものさへある。潮來十二橋とは誰が名づけたか、名づけた名だけは風流だが、名に懂れて来た人は皆失望する橋と聞いてゐた。しかし私にはそこがまたねらひ所で、兩岸の無花果が枝をさしかはした下に、手長鰻のはねてゐる流れなどうまく取扱へば却て趣のある句を得られさうにも思へるのであつた。

渡舟を上ると、そこがすぐ十二橋の入口で、折しも一艘の小舟が唐黍を積んで棹さして來るところであつた。この小舟は蒸汽の航路に出て、對岸の潮來へわたるのである。私は舟

とすれちがひに川べりの小道をもとめて加藤洲の奥へ歩いて行つた。橋は半丁か一丁位の間隔を置いて架けられてある。水邊にある濯ぎ場に下りて見ると、兩岸の木の枝が覆ひかぶさつてゐる下に、その粗末な橋が三つ四つ重なつて見える。私の立つ濯ぎ場の傍らには紫陽花あじさいが咲いてゐて、その花と橋との對照がなかなか捨て難い風情をもつてゐるのであつた。

私はこの景をながめながら、前から考へてゐたことを變更しなければならぬと思つた。それは何のであるかといふと、十二橋といふ詞を句の中に入入れずにそれを前書であらはずことであつた。十二橋といふ名稱は人口に膾炙してゐるだけにどこことなく俗な味がある。それを句に入入れれば句全體も俗な味を持つことになるから、これは前書の方へ敬遠するに如くはないと考へてゐたのであつたが、いま實景を前にすると、このささやかな橋のかさなつて見えるさまは、「十二橋」といふ詞を使はぬとどうも現はしにくい。少なくとも「十二橋」といふ詞を使へば、樂に現はせるといふことがわかつた。そこで私は豫定を變更して「十二橋」を句中に入入れることとし、しばらく考へた後に、

濯ぎ場に紫陽花うつり十二橋

といふ句を得た。

それから二年ほど経つた梅雨すぎの候に、「東大俳句會」

の吟行があつて、小さな發動機船がこの十二橋にさしかかつた。その時皆がこの「濯ぎ場」の句を憶えてゐて、實地檢分といふ眼付きで一々濯ぎ場をしらべたものである。しかるにどうしたことか、私の見た紫陽花の薄紫の花ほどの濯ぎ場にも映つてゐなかつた。

「さては、例によつて頭の中で咲かせた花だな」と、草の芽俳句前期の頃だつたので、議論がなかなかやかましくなつた。

その後又二三年経つて、K氏がここを通つた時は額の花が鮮かに水に映つてゐたといふことであつた。額は勿論紫陽花の一種である。して見れば「濯ぎ場」の句の眞實性は實證されたわけであるが、それは客觀寫生詩人を閉口させるに役立つだけの話で、私にはどうでもよいことであつた。私は、自分の見た紫陽花が幻影であつたとしても、それで少しも差支へはないのである。

昭和九年十月号雑誌「馬酔木」から

その他、小文を書いた人に作家の長田幹彦「水郷の夏」(明治41)、尾崎一雄「水郷めぐり」(昭和15)、小島信夫「残酷日記」「鬼」(昭和30)、吉行淳之介「水の畔り」(昭和30)、画家 竹久夢二「涼しき土地」(明治40)、小川芋銭「水郷十二橋」(昭和8)、また島崎藤村(作家詩人)「利根川だより」、朝倉文夫、(彫刻家)「利根の釣り舟」、太田卯(農民作家)「水郷秋色」等があげられる。

新しい発見を求めて…

吉川 俊

平成二十年度研修視察結果

歴史を学ぶのは直接、自分の足で歩き、目で確かめることが大切。そうすることにより新しい発見や感動を得られる。街かどのあちこちに日本の歴史は息づいており、見る人をして興味をそそらせる。今回の研修地は「小石川後楽園・六義園・巢鴨とげぬき地蔵」である。当日の歴史散策メモを整理してみた。

小石川後楽園

最初の研修地は、首都東京に残る旧水戸藩の「小石川後楽園」である。文化財保護法によって国の特別史跡・特別名勝に二重指定されている。二重指定は、浜離宮恩賜庭園、金閣寺毛越寺、平城京などごく限られている。

築地塀を入ると東京ドームが見える。昭和一二（一九七三）年に開場した後楽園スタジアムが、半世紀の役目を果たして、昭和六三（一九八八）年から新球場が発足した。

後楽園庭園は、水戸藩祖・頼房が寛永六（一六二九）年に

將軍家光からこの地を賜わり上屋敷と庭園を造営し、光圀（水戸黄門）のときに完成した。もともと小石川の低湿地だった所を利用して心字池をつくり、神田上水の分流を導入し、奇石を配して、山あり谷ありの変化に富む回遊式築山泉水庭園に仕上げた。後楽園の名称は、中国宋の名臣・范仲淹（はんちゅうえん）の「岳陽樓記（がくようろうき）」にある「天下の憂いに先んじて憂い、天下の樂しみに後れて樂しむ」からとっている。庭園と園内の多くの建造物は、関東大震災と太平洋戦争末期の空襲で、大損傷を受けたが、戦後多くが修復された。なお、庭内の北側・梅林に、安政の大地震（一八五五年）のとき、この藩邸で圧死した藤田東湖先生護母致命之処の石柱が立っている。

水戸藩邸は、明治維新のとき政府に官収され、わずかに庭園部分が保存されただけで、大部分（球場・遊園地一帯）は、兵部省造兵司のもとに、陸軍の東京砲兵工廠と技術者養成機関の諸工伝習所が設置された。「諸工伝習所之跡」の記念碑が、駅北側の礪川公園に建てられているという。都市化につれて工場移転がすすめられ、明治三八（一九〇五）年に北区下十条に、さらに関東大震災で爆発をおこしたので広島に移されるなど、分散したが昭和初期まで活動していた。

千代田区役所商工観光課に花暦を照会すると、三月下旬のシダレザクラと六月中旬のハナシヨウブを中心にロウバイ、

ウメ、シユウガミズキ、シダレザクラ、フジ、タイサンボク、ハナシヨウブ、ハス、サザンカ、フユザクラなど花はほとんど通年咲いている。

ウォーキングは真夏を除く季節すべてが適期。四季折々の花が咲き、とくに花の貧弱な季節に訪ねたほうが散策には適している。「涵徳亭」前広場にあるシグレザクラは庭園のシンボリックな存在。「円月橋」は、水面に映る形が満月のように見えることからつけられた名称。明の儒学者、朱舜水による設計といわれて、当時の姿を留める貴重な建造物である。

朱舜水は中国の明朝滅亡後、日本に亡命・帰化した。寛文五（一六六五）年、水戸藩・徳川光圀に招かれ、この地で儒学を教授した。その大義名分を重んじる思想が、水戸学の形成に大きな影響を与えたといわれる。

園内には光圀一八歳のとき、史記「伯夷列伝」を読み感銘を受け、伯夷（はくい）叔斉（しゆくせい）の木像を安置した「得仁堂」がある。

都観光ボランティアから「陰石・陽石」の若干の説明があった。移動バスの車窓から創始者・嘉納治五郎が起こした柔道の総本山・講道館本館を懐かしく見ながら、茨城・大宮町（現・常陸大宮市）の光圀にかかわる陰陽神社の存在を思い出し、次の研修地に向かった。

陰陽神社（参考）

常陸大宮市山方（旧那珂郡山方町）の陰陽山森林公園内にある陰陽山の標高は二三三m。ふもとの駐車場から鳥居をくぐり長い石段を一〇分余り登ると幣殿があり、さらに五分ほどで陰陽神社本殿に着く。「陰陽神社」を置いたのは、水戸黄門、水戸二代藩主・徳川光圀だった。寛文元（一六六一）年、光圀が領内巡視の際、南の上大賀村から山頂の巨岩「夫婦岩」を望み、二体の柱状石の偉観に驚嘆し、神社の創建を思い立ったといわれる。しかし、当時この山は小口家の持ち山であったため、小口氏には代替の山林を与え、三〇年後の元禄三（一六九〇）年に「夫婦岩」を「陰陽石」と改め、陰陽神社として再興。元禄四年に社殿が完成し、伊邪那岐、伊邪那美を祀ったのが始まりといわれる。

この光圀公、晩年、水戸の北にある西山荘に隠棲し「大日本記」を著し、神仏分離を推進し名社名刹には特別な庇護を加え神道興隆につとめている。こうした古神道への傾倒ぶりから、巨石信仰にも並々ならぬ関心を寄せていたらしい。

堅破山にある、真つ二つに割れた巨石を見て「最も奇なり」と感銘し、太刀割石と命名したのも光圀といわれている。また、鹿島神宮のご神体である要石の正体を見極めるようと、七日七晩この石の周りを掘らせたという伝承もある。

しかしながら立石状のこの石を、性神としての陰陽石に見

立てるには少々解せないものがある。東側にある陰石は、高さ一〇m、横二・三m、厚さ二・五m。西側の陽石は高さ八・八m、横五・六m、厚さ一・九m。身長ではノミの夫婦となり、もともと一つの大岩が割れたもののようにも見える。

一般に陰陽石には、性信仰や性器崇拜の原始信仰の流れによるものが多いが、この陰陽石の形状は、陰と陽を対でとらえる中国思想の太極的な陰陽論に基づいて名付けられたものと思える。

六義園

次の研修地は、江戸の名園を今に残す和歌の庭「特別名勝・六義園」である。ボランティアガイドの案内により園内を二班になって散策した。六義園は五代將軍・徳川綱吉の信任が厚かった川越藩主・柳沢吉保（側用人・老中、川越・甲府城主）が元禄八（一六九五）年、加賀前田家の屋敷四万六〇〇〇坪を賜わり、七年の歳月をかけて完成したみごとな大名庭園である。六義園は、小石川後楽園と並んで江戸の二大名庭園といわれ、庭園は中の島を配した大泉水を樹林が取り囲み、格式を感じる。中国・日本の故事・名所・歌枕などになぞらえて、景勝地八十八カ所を選んで造園し、標柱を立てたが、後楽園の中国趣味に比べて、日本の情趣が主体になっている。築山を巡って縦横に通じる小路をたどり、茶亭に休み

ながら、回遊式築山泉水庭園の変化に富む景観を楽しむことができる。

元禄一五（一七〇二）年に築園した和歌の趣味を基調とする「回遊式築山泉水」の大名庭園である。当園は池をめぐる園路を歩きながら移り変わる景色を楽しむ繊細で温和な日本庭園である。

江戸時代の大名庭園の中でも代表的なもので、明治時代に入って、三菱の創業者である岩崎弥太郎の別邸となった。その後、昭和一三（一九三八）年に岩崎家より東京市に寄付され、昭和二八（一九五三）年に国の特別名勝に指定された貴重な文化財である。

六義園正門を入ると左手に内庭大門、庭園の中心に入るとめの門で広場には、シダレザクラの大木が植えられている。「内庭大門」。順路にしたがって進むと見事な枝ぶりのシダレザクラと対面する。咲く時季に訪れたい。

大泉水沿い時計回りに進むと方向が変わるにつれて景色が変わり、造園技術の確かさを感じる。大泉水の池畔の名に一つの「出汐の湊」。眺望に恵まれ、右手が中の島、左手に蓬萊島、対岸に吹上浜が望めると進む。明治年間、つつじの古木材を用いて建てられた「つつじ茶屋」。戦災をまぬがれて、現在にその希少な姿を伝える。庭内の八十八カ所の景勝地には、それぞれに石柱が建てられていたが、現在は三十二

カ所のみ残るといふ「石柱」。あずまやの横を溪流が走り、岩の間から落ちて水飛沫を上げる。瀧や石組などの景観や水音が楽しめる「滝見の茶屋」。竜の背のように見える「臥龍石」。訪れた時のモミジの紅葉は見事であった。

六義園サービスセンターに花歴を照会すると、春のシダレザクラやツツジ、秋のハギ、そして冬の到来を知らせるハゼ、ヤマモミジの紅葉と、それぞれの季節に合った植物がある。四季を通じてロウバイ、ウメ、コブシ、シダレザクラ、ツツジ、ミズキ、エゴノキ、タイサンボク、ハギ、ハゼ・ヤマモミジ紅葉が楽しめる。

(財)東京都公園協会によると、都立九庭園では紅葉の美しいこの時季に、「公園がとりもつ「園」むすび都立庭園スタンプラリー」を開催中。五庭園分のスタンプを集めると「庭園カレンダー二〇〇九」のプレゼントがあるとのこと。

都立九庭園：①浜離宮恩賜庭園 ②旧芝離宮恩賜庭園

③小石川後楽園 ④六義園 ⑤向島百花園

⑥清澄庭園 ⑦旧古河庭園 ⑧旧岩崎邸庭園

⑨殿ヶ谷戸庭園

巢鴨 “とげぬき地蔵”

地蔵通りは旧中山道にある。地蔵通りの入り口左手に、江戸六地蔵の一つの真性寺がある。境内には儒者北条霞亭の墓があり、頼山陽の絶筆となった墓碑銘がある。地蔵通りの商店街の右側に「とげぬき地蔵」で有名な名刹寓頂山高岩寺がある。おばあちゃんの原宿として名高い。高齢者に人気の巢鴨とげぬき地蔵尊・商店街等を探索した。

ご本尊は、「とげぬき地蔵」であり、靈験あらたかな延命地蔵尊(秘仏)は、善男善女から信仰を集めている。

また、境内の「洗い観音(聖観世音菩薩)」は、水をかけ、自分の悪いところを洗うと治るといふ信仰が生まれた。今は二代目の観音様を布で洗うようになっていた。

もと下谷車坂付近(上野駅東側)にあったが、明治二四年にここに移ってきた。病気に悩む人が、この地蔵の御姿を飲むなり、患部にはると、とげが抜けるように治るといわれ、毎月の四日・十四日・二十四日は地蔵尊の縁日で、大変なにごわいである。

巢鴨地蔵通り商店街振興組合を訪ねた。「巢鴨地蔵通り絵図帳」を発行し、店頭に椅子を設け、万一に備えAED(自動体外式徐細動器)が三カ所設置されている。近隣の巢鴨信用金庫本店では、縁日には観光客等に湯茶の接待をしている。地域ぐるみの取り組みに感嘆した。高岩寺境内に「とげ

ぬき生活館相談所」がある。相談日は毎月の月・水・金のほか縁日。家庭内のもめごと、子育てや教育、老後の生活、結婚・離婚、職場・近隣、相続、土地家屋、金銭貸借、信心等の相談を無料で受け付けている。

この地藏通りを五〇〇mくらい進むと、庚申塚がある。庚申塚は街道の分かれ道に置かれて、旅人の安全を祈ったもので、道祖神猿田彦神を祀ったものだという。申は「さる」であることから、庚申堂には猿田彦神を祀ることが多い。

「とげぬき地藏尊御縁起抄」

高岩寺境内の「縁起抄」をデジタルカメラで撮影したものを転記した。

当寺曹洞宗萬頂山高岩寺は、今を去る約四〇〇年前（慶長元年＝一五九六年）江戸湯島に開かれ、約六〇年後下谷屏風坂に移る。明治二四年、区画整理のため、当地（北豊島郡東鴨町）に移転、今日に至る。御本尊はもとより靈験あらたかな「とげぬき地藏」として知られる延命地藏菩薩である。

正徳三年（一七一三年）五月のこと、江戸小石川に住む田付という人の妻、常に地藏尊を信仰していたが、一人の男の子を出産して後重い病に見舞われて床に臥し、手足は「細き竹のごとく」にやせ細ってしまった。諸々の医者手がつくしたが一向によくならず、遂に夫人は臨終を覚悟し、「私の

家には怨霊があつて、女はみな二十五歳までしか生きられないと父母から聞いております。姉も二十五歳でなくなりました」といい出すしまつであつた。田付氏は悲歎にくれつても、この上は妻が日頃信仰する地藏尊におすがりするほかはないと、毎日一心に病氣平癒の祈願をつづけた。ある日のこと、田付氏は不思議な夢を見た。黒衣に袈裟をかけた一人の僧が現われ、「私の像を一寸三分に彫刻して川に浮かべなさい」という。田付氏は、それは急には成し難いことを答えると、「ではあなたに印像を与えよう」といわれ、夢からさめた。不思議な夢と、ふと枕もとを見ると、何か木のふしのようなものが置いてある。よく見るとそれは、「彫つたもので書いたものでもない」不思議な地藏菩薩の御す影なのであつた。田付氏は命の通り、これを印肉にしめして、宝号を唱えつつ一万体の御影を作り、両国橋に行き、一心に祈願しながらこれを河水に浮かべた。さて、その翌日朝まだき、田付氏は、病床の夫人の呼ぶ声に急いで行ってみると、夫人は「今、枕もとに死魔が現われましたが、錫杖をもつた黒衣のお坊さんが、錫杖を使って外にドンとつき出してしまわれるのを見ました」と告げた。田付氏は靈験に我を忘れていたが、あれほど重かつた夫人の病は一日と快方に向い、その年の十一月には床をはなれることが出来、以後夫人は無病になつたという。

田付氏がこの靈験の話を山高という人の家でしていると、

一座の中に毛利家に出入りする西順という僧がいて、ぜひその御影を頂戴したいという。田付氏は持っていた二枚を与えた。正徳五年のある日この毛利家の女中の一人が、あやまつて口にくわえた針を飲み込んでしまった。女は苦しみがくが医者も手のほどこしようがない。そこに西順来たり、「ここに地藏尊の尊影がある。頂戴しなさい」といって、一枚を水で飲ませた。すると間もなく、女は腹中のものを吐き、きれいな水で洗っていると、その中に、飲み込んだ針が、地藏尊の御影を貫いて出てきたという。

右は、この田付又四郎氏が、享保一三年（一七二八年）七月十七日、みずから記して、高岩寺に献納された靈驗記の一部である。

当日の天候

「前線通過で突風や大雨」→横浜で三人軽傷：日本列島は五日、前線の影響で全国的に雨模様となり、西日本を中心に十二月としては記録的な大雨を観測、各地で強風も吹き荒れた。関東地方を中心に被害や交通機関の乱れが相次いだ。気象庁によると、週末にかけては強い寒気が入って、全国的に厳しい寒さとなる見込みだ。（茨城新聞・平成二〇年十二月六日付）

船頭小唄

大正七年（一九一八）は童謡雑誌「赤い鳥」が創刊され、カナリヤ（西条八十詩 歌を忘れたカナリヤは）という童謡が雑誌に載り、唱歌に飽きた大衆がこれを歌い始め、話題を呼んだ年であつた。

そんなある日、茨城県潮来^{いたこ}町の川べりにある運輸会社の改札主任は、面会を求められた男を前に首をひねつた。そのころの潮来の川岸は大きな堤防になっており、潮来のシンボル旅館ともいふべき料理兼旅館が二軒ほど偉大に横たわつていた。この旅館からは名物「あやめ踊」の太鼓がひびき、すぐその近くが船着場になっていた。まだその頃は通運丸という明治時代の外輪船が利根川を往復していた。この船は胴中に水車のようなものがついていて、それで水を掻きながら進むのだが、いかにも川船らしくたのしい風景だつた。

現在のように橋もなく、したがって自動車もなかつたから、潮来ゆきはこの川船か、小さな舟にたよるよりほかに、小舟は佐原が発着所になつていて、ここからは、鉄道にたよることになる。

改札主任は自分の前の四十男をつくづく見たが、申出では本当であつた。男は水戸に住んでいる野口英吉という詩人だと名乗つたが、それにしてもあまりにもみずばらしい身なり

であつた。いや身なりよりもその憔悴ぶりにおどろいた。自殺でもしそうな男が水戸までの旅費を貸して欲しいという。つい月に見惚れて費い果したともいつた。

始めて会う人だが名は新聞で知つていた。物腰しもまことに丁寧で好感が持てたが、それにしても水戸はすぐそこである。いくら金額でもなかつた。詩人ののん気さをうらやましく思ったが、幾度も感謝しながら消えてゆく後姿が、ちつともものん気そうに見えず、妙に気になつてならなかつたという。

この改札主任もやがて成功して県会議員になり、このたった一回の出会いが、「船頭小唄」の建碑にまで発展するのである。

雨情は当時水戸の駅近くに住んでいたが、生活は極度に苦しかったようである。長い放浪の旅はようやくやおさまつたが、やはり詩はあまり売れなかつた。有名でない詩人の生活はまことにみじめなものである。かつて有名な詩人の佐藤惣之助はわたしにいつた。

「詩人じゃ絶対に食えんよきみ、食えるもんか！ 女房の奴が生花をやっているんでね。おれはまア安泰だが―。」

と、さびしい笑い方をした。もつとも現在はその詩人も全く様子がちがつて来た。

雨情が潮来の月に身も心も打ち込んで書きあげたのが「船頭小唄」の原歌であつた。なぜ原歌かといへば、この歌は全

部が潮来で出来上がったものでなく、数次の苦吟につぐ苦吟を経たものだからである。

「船頭小唄」は最初テーマだけは出来たが、発表するあてもなく、月日は流れてようやく東京の「金の船」に迎えられることになった。「船頭小唄」がどうにか出来たのは、潮来を訪ねてからしばらくのちのことである。童謡発表の前途は開けかけたが、東京の本舞台を踏む雨情には雨情としての苦悩があった。それは作品が水戸の新聞からさえも泥くさい作品あつかいをされていること、有名でないことであつた。しかも早稲田出身の誰彼は、みんなそれぞれ名をなしている。島村抱月・相馬御風・三木露風、ことに相馬御風などは「カチューシャの唄」ですでに天下に知らぬものはない。

学校を出てすでに十五年、この辺で自己の進路をきめねばならぬ。世にいられるか、すてられるか、幾多の苦闘に耐え忍んで来た雨情がそれを考えない筈はなかつた。雨情は表面まことに静かだが、内に烈しい情熱を秘めた人であつた。雨情の芸術は童謡にしる民謡にしる、この烈しい情熱のルツボを通過してからでなければ生まれえない、したがって遅筆であつた。

始めたばかりの童謡は、その世界が海のものとも山のものともわからず、これは世の批判にまつよりほかなかつた。そこで中山氏に会い、原歌の作曲を頼んで結果を待った。わたしはその場所を代々木山谷の中山宅ときいた。これまで長年

苦勞して来た「民謡詩」で勝負と出たい気持ちは原稿にも現われていたのだろう。

「それがツギハギの原稿でね。これだけくらい貼りつけてあるんだよ。」

中山さんは指で大きさに厚さをつくつてみせた。

「金色夜叉を書くとき尾崎紅葉は、文章に大変苦勞して、天井に原稿を貼りつけて、想を練つたというがね。」

中山さんはこの原稿の題も気にいらなかつたらしい。

「いやに暗い歌でね。読んだだけで泣き歌になっちゃうんだ。原歌は確か『枯すすき』という題であつたと思うが、それじゃ歌にならんのだね。」

「船頭小唄」は「枯すすき」で通っているが、元の題も「枯すすき」。それを相談の上「船頭小唄」になおしたものだ。という。「枯すすき」はこの詩にピタリの題だが、それでは一方に偏していて一般受けが悪かろう。「船頭小唄」となれば、「船頭」という地方的なものに「小唄」という都会的な味がつく。

中山は自分の自費で出版している「新作小唄」という楽譜から「小唄」の二字をとつて「船頭小唄」とした。雨情は面白くなかつたと思うが、中山の見識はまことに大したものであつた。

雨情の作にも、中山の作にもこの唄以前に「何々小唄」というものはなかつた。おなじ中山の作曲した「東京行進曲」

(昭和四年流行)が行進曲という名のついて流行歌の最初のものであるように、この「船頭小唄」も小唄と名のついた流行歌の最初のものである。

「船頭小唄」は中山さんの話では、一年近くも放っておかれた。どうつけても詩の暗さを転換させるような曲は浮ばなかつたし、それまでずっとコンビであつた北原白秋の明るいイメージが残っていてどうにもならない。

「この原稿も苦勞したな。」

と思うとこのツギハギが苦になつて、なかなか曲想が浮かばない。白秋の歌には南国的な明るさがあつた。そして東京でも受けたが、この泥くさい北方の歌が果たして東京でよろこばれるだろうか。中山は長野県出身で、明るい土地とはいかぬ。その暗さと北方の暗さとの激突である。その暗さが宿命的にのしかかる。この暗さが中山にとって一番頭がいちたかつたという。

何回も催促されたが、そのままになっているうち、ある日強硬な督促を受けたので、こいつはいかんと出来ない訳を正直に話した。すると雨情は鼻をつまらせたような声で歌ってくれた。それがなんとも素朴で、哀れな調子であつたので、よし！ これでいこうということになり、このメロディに中山の発想を加えてつくりあげたのが「船頭小唄」であつた。

「船頭小唄」は雨情にとって運命の唄であつた。明治三十

八年詩集「枯草」を世に出して以来すでに十五年、自分が始めた「民謡詩」の結着よりも、人生の結着をつける曲り角に來ている。自分の作つた「船頭小唄」の良否よりも、その詩業の正否に見きわめをつける必要があつた。中山晋平はすでに七年以前音劇から「カチューシャの唄」を大衆とともに歌つて大成功をおさめた人。この人とのコンビによる歌で自分の運命もきまる。中山に対する強硬な作曲の催促も、そんな意味が強かつたように思う。

「船頭小唄」は野口雨情が逆境へのコンプレックスの現われとも思える歌だが、職場こそちがえ中山晋平にとつてもそんな立場であつたことは否定できない。

自分を学校へ通わしてくれた島村抱月、自分を作曲の道へリードしてくれた芸術座、作曲を大衆へ伝えてくれた松井須磨子、その二人が僅かの間に死んで、ひとりになつた。天下に響いた名は残つたが前途は全くわからない。ことに小学校の職場にも、流行歌の作曲に対するゼラシーや圧迫がしきりである。だいいち今後作品は出来ても、以前のような発表の場さえないのである。「船頭小唄」は大正十年三月(中山晋平 萱間三平作曲)新作小唄第十三篇として山野楽器から発売された。共作の萱間三平は、中山晋平が職場での風当りを避けるためのペンネームで、そのペンネームを二人の作曲にしてあるのは雨情の自由独唱が混入していることを示したものの。

「船頭小唄」はどうして流行させようかなどという職業会社（プロダクションなど）の媒体は殆んど絶無の時代で、自費出版の楽譜が大衆への唯一の接触であったから、全くこの作品は雨情・中山二人の心のままの作品であったと同時に、不安きわまらない作品でもあった。

出版元の中山も、こんなものが売れるかと思つたほどだったというから、表紙もこの唄のようにさびしいものだった。

しかし演歌師は、この二人の命がけの作品を捨ててはおかなかった。

「船頭小唄」を最初に広めたのは夜の演歌師たちであった。この演歌師の集団は大正三年以来、自分たちの職場に挑戦していた中山節の拡大につとめた訳で、やがてこれが外国資本のレコード会社の設置につながり、自分たちの職場をレコードに奪われる結果になるのは、まことに皮肉なめぐりあわせともいえる。

「カチューシャの唄」以来演歌師集団はジリジリと職場を犯されながらも、それらの唄が演歌販売ルートを通らなくては、全国的に広まらないことを知っていたから、中山晋平の西洋式メロディを、一方に苦々しく感じながら、これを販売せざるを得なかったし、それがまた大きな生活の糧ともなった。

しかし「船頭小唄」が大正十一年に至って急激に伸びたの

は、映画がこれを取りあげたからである。日本映画の幕明けともいべき松竹蒲田撮影所が出来たのは、大正九年（一九二〇）六月それから二年目、松竹は「船頭小唄」の流行に目をつけ、「虞美人草」でデビューしたばかりの新人女優栗島すみ子を器用、これに岩田祐吉を組ませ、のち「浪花小唄」で名をあげた柳さく子を助演に潮来をバックに、日本最初といわれる小唄映画を素早く数日間で作った。監督は池田義信であった。

この映画の大ヒットにより栗島すみ子は、日本の恋人として一躍有名になり、このロケを縁に池田監督と結ばれることになる。まだ声のなかった映画時代、小唄映画という物珍しいタイトルと、「船頭小唄」のメロディは、映画とともに日本全国に広がった。

レコード企業は当時全くなかった訳ではなく、大正三年（一九一四）オリエンツという小会社が「カチューシャの唄」二万数千枚売ってつぶれかけた社をたてなおしたように、この「船頭小唄」も大正十一年スピックスという盤が、中山歌子歌手（松井須磨子に代って出た女優）で出しているが、どうした訳か不調に終わっている。

雨情は童謡作家で、童謡によって世に出たと思われる向が多いが、それは本当でない。雨情が童謡発表の舞台を確実に得たのは大正八年（一九一九）ころからであり、代表的作品「七つの子」も大正十年の発表である。世上歌われているも

ののうちで大正九年以前のものは無い。もちろんこれは、雑誌発表の時のことで「七つの子」は明治四十年に詩集「朝花夜花」に発表されたものの改作であることはすでに書いた。しかし歌謡にしても童謡にしても、曲とともに生きていくほうが強いから作曲されたときが問題になる。

大正八・九年当時の童謡は、新作童謡が生まれて間もない頃のことでもあり、作曲されて全国的にゆきわたるには時日がかかり、その流行も流行歌の比ではなかった。レコードはなかったし、あつても童謡は論外で、演歌師たちはあまり童謡を取り上げなかった。したがって「七つの子」が代表作の位置を占めたのは現代であつて、野口雨情の名を広く天下に紹介したのは「船頭小唄」であつた。

(二) 雨情は「船頭小唄」の大ヒットによって自分の詩の勝利を獲得し、民謡詩というものの大衆への伝播力を確認した。そして作曲の力の偉大さも知った。時に雨情四十歳。

(三) 中山は大正三年の「カチューシャの唄」に唱歌調の洋式転換を試み、大成功をおさめたが、「船頭小唄」の作曲で日本の民謡調にも強力なものを感じた。そして民謡が民族にぬきがたい力を持つことも体験した。この「船頭小唄」を起点に地方民謡への創作に打ち込むことになる。中山晋平時に三十五歳。

(三) 映画は「小唄映画」という新しい進路を発見して、唄による映画の浸透生の偉大なのおどろき、続々と小唄映画をつくることになる。「船頭小唄」につづいて、大震災のあと(大正十三年)「籠の鳥」が帝国キネマで映画化全国的に流行をみた。

(四) 「船頭小唄」は雨情にとつて最初の作曲新民謡であり、流行歌謡曲であつた。土の自然詩を主張する四十歳の詩人に、明治調の残るのは否定できないが、「カチューシャの唄」で新風を送った中山晋平が、十年近くでひたたび明治時代の演歌調に逆戻りしたことは「雨情節」にいささか影響されたとはいへ、その妥協ぶりを批判される。

しかしこの金色夜叉的な演歌調こそ日本の流行歌がもつ大きな宿命的特徴なのだ。中山晋平ほど大衆の心を考え、大衆に愛情をもって作曲した作曲家はすくない。

「船頭小唄」から新民謡の作曲に打ち込むようになったのも、日本人の持つこの本質的なものに心を動かされたからであらう。日本の唄として「出船の港」や「ほこをおさめて」「波浮の港」などが、世界の人たちに受けたのも、そこに日本的なものがあつたからで、この中山の決意によるものであつた。

(五) 雨情・晋平コンビによる新民謡の開発によつて、地方民謡が著しくさかんになった。地方民謡の開発に

力のあつた人たちには、作詞に北原白秋・西条八十、作曲に町田佳声（嘉章）・藤井清水など多くあるが、今も最も人々に愛されているのは雨情・晋平コンビによる地方新民謡である。この地方新民謡の制作は、地方に眠る旧民謡をゆり動かし、伝統芸術の尊さと永遠性を改めて国民に認識させるに役立つた。

「船頭小唄」の大ヒットは以上五つの大きな意義をもたらしたが、もちろん当時そんなことがわかる筈はなく、大流行歌につきものの批判がこの唄にも猛烈に起こつた。

現在とちがひ、当時は、縁日、盛り場などの演歌師たちによつて流行歌は伝わる。人に好かれるもの、しからざるものは街頭で大方区分され、消えるものは消え、残るものは残る。テレビ・ラジオ・レコードのなかつた時代の流行はおそかつたが、大人にも子供にも歌われ、小学生までがさかんに歌うようになる、その影響を気づかう道学者や教育家の批判が高まり、歌うことを禁じる県さえあつた。

それに加えて、歌の流行中、関東大震災が起こり、東京一円焼野原と化した。

ところがある高官が「国民が「枯すすき」のような頹廢的な歌にうつつをぬかしているから、天罰が当たつたのじゃ」と烈火のように怒つたという話が電光のように伝わり、それに共鳴するものが続々現われるようになると、悲しいことに

大衆は動く。

この唄が地震を連れて来たように取り沙汰され、「船頭小唄」の節に合わせて「地震小唄」まで歌われるようになった。「貧棒小唄」「のんだくれ小唄」そしてきくも無残な替歌が、みんなそれぞれ歌われて話題に火をそそぎ、この唄と地震を結びつけた「困つたね」という唄まではやつた。おそらくヒットした歌を批判する歌がはやつたというのは、「船頭小唄」が最初で終わりだろう。それだけこの唄が人々に歌われたという証拠にもなる。

一方これが雨情と晋平を苦しめたことも事実である。「船頭小唄」以来歌謡曲のヒットは「旅人の唄」他二、三ぐらいで、それも「船頭小唄」には遠くおよばず、あとは地方民謡と童謡に力を注ぐようになり、「船頭小唄」の話は雨情・中山の二人には禁物で、たのまれても色紙などにも書かなかつた。

「船頭小唄」が中山に与えた最も大きなものは、学校の職場における圧力であつた。すでに「カチューシャの唄」の大ヒット以来、軟弱な歌の作曲をする音楽教師としての批判をしばしば受け潮来町の船着場で改札主任をやつていた人の提唱にかかるもので、わたしに碑文字書きが回つて来た。ある雨の日息子をつれて碑石えらびに筑波山麓の稲田へ出かけた。この石工場は一山を抱えるほど大きなもので、自由に選んで欲しいという。わたしは特大という大物を選んだ。唄が

さびしい唄だし建つ処は利根の大河の一部を見下ろす高台である。小さな石では川に石が負ける。

除幕には多くの人々が参列して賑やかであった。「船頭小唄」の映画を監督して名をあげた池田義信氏と栗島すみ子夫人が参列して花を添えた。映画撮影後四十何年ぶりの訪問という。除幕した雨情さんの孫娘二人と、参列中にたった一人の幼な友達兼吉（当時八十五歳）がいたことは雨情碑の主にとって何よりのよろこびであったにちがいない。

「船頭小唄」は毎月各社から何十種か発売されるLPレコードには、必ずといっていいほどいくつかはいっている。永遠の歌の証拠である。

「枯すすき」考

一

おれは河原の 枯すすき
同じお前も 枯すすき
どうせ二人は この世では
花の咲かない 枯すすき

二

死ぬも生きるも ねーお前
水の流れに 何変ろ
おれもお前も 利根川の
船の船頭で 暮らさうよ

三

枯れた真菰に 照らしてる
潮来出島の お月さん
わたしゃこれから 利根川の
船の船頭で 暮らすのよ

（水郷潮来観光ガイド資料より）

私の潮来史

岡本保美

現役を退いて十有余年、「晴耕雨読」とシヤレ込むには土地は無し、白内障手術三回、更に緑内障の虞れありとの診断で現在も通院中の身では読書も俛ならず、烏兔忽忽たるときを送っております。

又、義父宮本利世（本会員）の十三回忌が数ヶ月後に迫っており、生前政治・教育・厂史と夜を徹して語り合った事を考えておりましたところ、近所の多田仁さん（本会員）より本会への入会を誘われ二ツ返事で決めました。

潮来については知らない事ばかりなので、大いに学ばせて頂き度く存じます。

そもそも当地への係わりは、昭和三十六年八月ナイルス部品（潮来工場へ東京より着任してきた時に始まります。

潮来町の工場誘致条例第一号（昭和三十三年）により翌三十四年一月二十日操業を開始。小泉より須賀へ、数十名より最大五五〇余名（全社一、六〇〇名）へと規模を拡大して行きました。当時の町長として御尽力を頂いた藤岡敏二郎さん（初代本会長）他一名、お二人を工場顧問に迎え、いろいろと御教示を賜り、私も公私に亘って大変お世話になりました。

私の結婚披露宴での事ですが、御挨拶を頂いた時は、どういふ話をされたか全然記憶にありませんが、（失礼）宴席になり、しばらくして私共の方へ顔を出されて「早く子供を作って見せてくれ。四世代の交流になるから」と言われました。間もなく私は本社転勤となり、長い東京生活をスタートさせたその翌年、長男が生まれて後日約束を果しました。

「良く忘れずに遠方より来てくれたね。全員集合をかけるから……」と言われてお母上様と二人、正座して迎えて頂き大変恐縮した事がつい昨日のように思い出されます。藤岡家とはその後も愚弟（日立製作所）、義弟（延方郵便局）、次男（鹿島郵便局）を始め一族で御縁があり、何かとお世話になり、私自身にとっても、四世代交流をさせて頂いております。先日ぶらりと長勝寺を散策し、藤岡家の墓参も何年か振りにさせて頂きました。

次いで同じく結婚披露宴で名司会をしてくれたのが、大久保錦一君（当会員）でした。彼とは高校三年間、同じクラスで常に私の「北隣」の席でした。彼が在学中から一人で背負って来たクラス会世話人の役を奇しくも引継ぐことになって現在数名で実践しております。

尚、彼のすぐ下の妹さんが、これ又私の「北隣」の旧家の御主人（本会員）で披露宴にも出席頂いた方へ嫁がれていて、塀越しに兄妹と三人で雑談を交わした事がつい先日のように思い出されます。

本会に入会させて頂いた御挨拶にと、本会員で且つ私の結婚披露宴同席者及びその配偶者のエピソードの一端を取り上げさせて頂きましたが、……それぞれの方々の御冥福を心からお祈りしつつ擱筆させて頂きます。合掌

追伸 二十一世紀に入った平成十三年四月、元禄二年以降三百年余年に亘って先祖を葬ってきた小田原の墓を延方に改葬、菩提寺も潮来西円寺に移し、文字通り潮来人となりました。

以上

編集後記

昨年は移動総会に始まり、会員の研修視察そして、拓本取りの講習会など実施出来ました。大変実の有る一年だったと思います。又天狗党関係のお墓参りや史跡めぐりなど実施出来ました。又本年度発行予定の第二十五号につきましては、天狗党関係の記事が中心となり、又多くの方々より御投稿いただきました。厚く感謝申し上げます。

第二十六号につきましても、会員の皆様方より原稿を沢山投稿していただきますようお願い申し上げます。編集後記といたします。御協力ありがとうございました。

事務局記

編集委員

委員長	山澤幸次	委員	折笠庄一
副委員長	谷玄明	委員	柏崎一雄
小杉光彦	額賀藤重郎	委員	荒原勇
尾崎廣	榑原照夫	委員	津賀信
関川家光	榑原照夫	委員	久米衛
久米昌明	榑原照夫	委員	塚本昌明
伊藤大介	榑原照夫	委員	伊藤大介
関戸正敏	榑原照夫	委員	関戸正敏
塚本孝	榑原照夫	委員	塚本孝
石津寿満夫	榑原照夫	委員	石津寿満夫
浅野三郎	榑原照夫	委員	浅野三郎
秋永守	榑原照夫	委員	秋永守
下河辺智夫	榑原照夫	委員	下河辺智夫
多田仁	榑原照夫	委員	多田仁
寺沢昭夫	榑原照夫	委員	寺沢昭夫
草野登美雄	榑原照夫	委員	草野登美雄
事務局	榑原照夫	委員	榑原照夫
宮本文雄	榑原照夫	委員	宮本文雄

ふるさと潮来第二十五輯

平成二十一年三月三十一日 発行
茨城県潮来市潮来

編集者 潮来市郷土史研究会
発行者

印刷所 尙かつら印刷



表紙写真…大生神社の庭上祭

潮来市立図書館



22311048627